

---

# 夜の歩き方

藁部 御門

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

夜の歩き方

### 【Nコード】

N0917X

### 【作者名】

藁部 御門

### 【あらすじ】

ある日突然見<sup>ぬ</sup>知らずの狂人に襲<sup>いぬ</sup>われた犬神<sup>がみしろや</sup>白夜は人間としての死と引き換えに人狼の力を手に入れた。

そんな力を持て余し、戸惑う彼に一人の少女と出会う。

彼女は人間では無いといい、この世界の危険と生き方を犬神に説明する。

「さあ、夜の世界へようこそ！」

## 宴の痕（あと）（前書き）

まだ、完成してない作品ですけど、  
何となく頑張っで行こうと思います。

汚い駄文ですが、よろしくお願いします。

## 宴の痕（あと）

夜空を見上げる、明日にも満月になろうという月は丸々と輝き、星は空を所狭しと輝いている。そんな夜に男と女が肩を並べて歩いている。女は月明かりでもしっかりと輝いて見えるほどの美しい髪を持ち、きりつとした目に、小さな口、整った鼻立ちといった顔のパーツが計算されたように並べ、十人が十人ほど美人と答える美女だった。男の方は、ダボダボの制服をだらしなく着用し、ボサボサの髪をしており、男女共に地元の進学校の制服を着ていた。きつと、普段ならその二人を第三者が見ればあまり釣り合っていない高校生カップルに見えるだろう、だが今の状態を見ればきつと、怪訝な顔をして通報されるであろう。

和歌や俳句でも作られそうな美しい夜に、きつと物語のヒロインであろう美女は電信柱に向かって胃の中身をリバーズしていた。

「うえええつ。気持ちわる」

彼女は美しい顔をぐしゃぐしゃに崩して、真っ青な顔をしていた。男はあきれた顔をしながら、彼女の背中をさすっていた。

「飲み過ぎなんだよ。お酒飲んだ事も無いのに、あんなハイペースで飲んでたらつぶれるに決まってるだろ」

「だって、酎ハイ飲んでたら気分がよくなってきて、それにみんながどんどんお酒をすすめてくるから」

男はため息をつきながら、彼女を見つめる。他の同級生が彼女に酒をすすめた理由が、彼女を酔わせて彼女の痴態が見たいからだと言ったら彼女はどんな反応をするだろう。きつと「そんな卑屈な事を考えるのは白夜くんだけだよ」といって彼らの肩を持つのだろうな。そんな事を考えながら、彼女が落ち着くのを待つ。

全て吐き出して落ち着いてきた彼女の肩を再び持つて、男と女は再び帰路につく。

「今日はありがとう、そんでごめんね」

彼女の言葉を聞きながらどうしてこんな事になったのかを思い返す。

男の名前はいぬがみしろや犬神白夜、高校三年生で帰宅部歴三年目だった。そして本日は文化祭だった。本来進学校の三年生が文化祭などに力を注ぐことなど無いのだが、今年は犬神の隣で酔っ払っている女、神宮綾芽あやめが、学校生活最後に面白い思い出を作りたいと言い出し、学校中の男たちが一斉にやる気になり、かつてないほどの熱気に包まれた文化祭になった。なにがすごいかというと、わざわざたこ焼きとお好み焼きを作るためだけに、関西に修行に行った奴がいたり、ただの金魚すくいじゃ面白くないからと人面魚をわざわざ手に入れにいったり。文化祭の宣伝のために選挙に使う車を借りて、他県まで宣伝に行ったり、ステージの部のために人気アーティストを呼んだりと、男たちは学園のヒロインに対して全力で媚びを売った。まあ結局誰にもはなびかなかったわけだが。

そういった男たちの報われない行動のため、文化祭は大盛況のまま幕を閉じた。そして当然のごとおこなわれる打ち上げ会に犬神と綾芽は参加したのだが、普段優等生で通っている綾芽は飲み過ぎてふらふらになったのでほぼ強引に犬神が宴会から連れ出して送る事にして今に至っている。

「まあ、別にいいけど」

犬神は綾芽に肩を貸しながら歩いて行く。彼は綾芽に対し肩を貸して歩いてはいるが、彼は決して綾芽の彼氏というわけではない。家が近所の幼馴染という奴である。まあ物語によくありがちなパターンである。

「だけど、白夜クンを強引に打ち上げに誘って良かった。一人じゃ帰れないところだったよ」

酔っ払いながらこちらを向いて話かけてくる綾芽に向かい犬神は笑いながら答える。

「まあ俺がいなくても、紳士の皮をかぶった狼たちが、綾芽を送り届けてくれるさ」

「そしたら、明日から私のあだ名が『ゲロ女』になってるよ」

その言葉を聞いて、犬神は、俺が綾芽を送って良かったと心から思った。なんせ学校の奴らの綾芽の崇め方は異常である。清く正しく美しいそれが学校のヒロインである綾芽へのイメージである。それを真つ向から否定する（たとえば目の前でゲロを吐く）なんて事をすればそいつに一生残るトラウマを与えかねない。やっぱりいつの時代のアイドルもうんこはしないものなのだ。そいつらの幻想を守ってやってただけでも犬神はいい仕事をしたと思った。

犬神は綾芽とずっと一緒に育った。幼少の頃は二人で悪戯ばかりして、近所の悪ガキの筆頭だった。小学校の頃は二人して、暴れまわり、小六の時には、近所の中学生に対して大人が仲裁に入るほどの大喧嘩を起こした。中学生になり、綾芽は犬神と一緒に悪戯や喧嘩などを起こすことは無くなったが、相も変わらず女とは思えないほど活発で犬神と一緒に遊んでいた。犬神は最初のうちこそ喧嘩ばかりしていたが、半年もするとおとなしくなり、大きな事件も起こさなくなった。二人の関係が少しずつ変わり始めたのは高校に入ってからだった。今まで男のように活発に暴れまわっていた、少女は弓道を始め急におとなしくなった、いやおとなしくなったというより女の子らしくなった。そして彼女の過去を知らない周りの人間たちは彼女を学園のアイドルとして持ち上げ、今に至っている。幸い彼女の過去を知っているのは、学校では犬神ただ一人だった。高校になって彼女とはあまり遊ばなくなり、また周りの目が怖くてあまり声をかけれなくなったため、彼女の素が出ることはめったに無くなり、犬神自身も彼女の事を周りに話さなかったため、彼女は今までずっとヒロインでありアイドルだった。

「今日は楽しかった？」

もうすぐ彼女の家が見えてくる所まで来ると、綾芽は犬神に対して尋ねた。

「そりゃ楽しかったよ、どうしてそんなこと聞くんだった？」

犬神は若干ひねくれながら答える。どうせそんな事を聞くという

ことは彼女の悪い癖が出ているに違いない。

「だって、今回の文化祭にしたって、今夜の打ち上げもかなり強引に参加したし」

少し声が小さくなりながら犬神に答えていく、酔いのせいか、若干泣いているようでもある。

「バー力。そりや面倒臭いと思っっていたけど、楽しく無けりや最後まで付き合わないよ。それにみんな打ち上げの時みんな笑ってたろ、楽しいから笑うんだよ。楽しくなきゃみんな愚痴しかいわねーよ。綾芽はいろいろと気を回し過ぎなんだよ」

彼女は頷き、下を向きながら、無理やり笑ったようなほほえみを浮かべている。

彼女は弓道部の主将になってから、いろいろと気を回すことばかりしている、綾芽はもつと肩の力を抜いたほうがいいと犬神は考えていた。

「綾芽は楽しかったのか？」

「そりや、楽しかったよ」

うつむいていた顔を急いで上げて犬神に答える。

「だったらみんなだいたい楽しいさ、それに今回の祭りの主役は綾芽だろ、主役がそんな顔されたら最後の最後で失敗って言われちゃうぜ」

犬神の言葉を聞いた綾芽は笑顔を浮かべながら、「わかった」と頷いた。そして家の前に到着すると一人で立って、犬神に向かって話かける。

「今日は本当にありがとう。明日からもよろしくね」

「了解」

そう言って答えると、彼女は家の中に入って行った。そして彼女の母親のどなり声が家の外まで響いてきた。彼女の母親の厳しさを知っている犬神はご愁傷様と思いながら、ほんの少ししか離れていない自分の家へと向かった。

犬神は空を見上げる、まんまとした月を見て、明日ぐらいが満

月かなと考える。空には無数の星がある、しかし、彼の目に真つ先に飛び込むのは月である。月の美しさの前には、全てが引き立て役にしか見えなかった。一日一日変化していく様も犬神は大すきだった。常に変化し、変わらない物など無いということを暗に示しているように思えた。変化の中で新月となり月が姿を見せなくなったときも、月の偉大さ、月の美しさを再認識するすばらしいスパイスだと思えた。太陽が周りをかき消しながら目立っているとすれば、月以外の物を自らの引き立て役にしながら輝く、そういった所も月に惹かれる理由だった。

月を見上げていると、一瞬影が月を横切った。

「えっ」

驚きもう一度月周辺を見上げる。一瞬ではあったが人型の何かを月を横切ったように見えたのだ。だが見直してみても何も映っていない。いつもと変わらぬ月だった。

「そのキミ少しいかな」

犬神は空を見上げながらさっきの影に不思議に思っていると不意に肩に手が置かれた。そして、彼の経験で日付が変わろうとするこんな時間に、学生服を着た人間に話かける人種を一人しか知らなかった。

やばいおまわりさんだ。彼はそう思っただけで体を固くした。なんせ現在彼は補導されるための条件が揃いまくっている。深夜徘徊、未成年飲酒、まあ普段ならおとなしくおまわりさんの言うことを聞くのだろっただけれども、今日はいやだった。犬神が捕まれば、学校に連絡が行き、クラス全員が怒られること必至である。最後の最後でそれは避けたい犬神は、肩に置かれた手を払って逃げようとした。だが、逃げようとしても足が前に動かなかった。

「えっ」

犬神が驚いて声をあげ、後ろを振り返ると案の定そこには、警官が立っていた。再度逃げようとしたが体がピクリとも動かない。

「逃げようとししないで、おとなしくしてください」

警官は犬神に向かって話かける。やさしくやさしく。犬神はどうやっても動かない体に恐怖を感じながら、警官に頷いた。犬神は逃げるのをあきらめたのではなく、逃げるタイミングをつかもうと考えていた。しかし、体が動かないため、どうしようも無くなっていた。

「あーあ、えーと、まずいくつか質問させてもらうよ」

警官はポケットから手帳を抜き出し、ペンを持って彼に話掛ける。犬神はどうか警官の方向に向き直る事はできたが、相変わらず足は動かない。生まれてからこんな事を一度も経験したことのない彼にとって、言い表しがたい恐怖が彼を包んでいた。

「キミは高校生かな」

犬神は尋ねられてもまともに答える気が無かった。体が動くようになるまで時間を稼ぎたかったし、第一自分の学校の事を知られるのは良くない。幸い男子の制服は他の学校ともかなり似ているためうまくすればごまかせるとも思っていた。

「うーん、シャキシャキとこたえてくれないといけないな、お願いだから。私も面倒だからね」

犬神は警官の面倒という言葉に反応した。これはうまくいけば誤魔化せる。そう思ってた犬神は口を開いた。

「はい、高校生です。近くの工業高校です」

犬神は自分の通っている学校と全く別の場所を答えた。彼は勤務を面倒臭ってる相手なら詳しくは聞いてこないと思ったのだ。

「了解、高校生つと」

しかし警官は、メモ帳に高校名を書き込んだ様子はなく、高校生という部分だけを手帳にチェックしたようだった。犬神がおかしいなと思った時、次の質問が飛んできた。

「キミ今日アルコール摂ったかい」

犬神は高速で首を横に振って「飲んでません」と否定した。まあこのことについて否定をしない高校生はきつといないだろう。

「嘘はよくないな、僕は鼻が聞くからわかるよ、キミがお酒をのん

だ帰りだつて事ぐらい。本当は汗を舐めて嘘か本当か判断してもいいけど、キミがいやがるだろ」

警官は犬神に向かつてくだらない嘘をつくなくと軽く睨んできた。犬神もさつきから続く金縛りと相まって警官の睨みが非常に恐ろしく感じられた。

「今さつきお酒を飲んでました」

犬神は正直に答えた。ほぼ無意識に答えてしまった。恐怖がだんだん膨らみ始めている。

「OK、飲酒つと」

メモ帳にまたチェックを入れている。そして犬神に向かつて、からみつくような嫌な笑いを浮かべながら、口を開く。

「最後の質問だ、正直にそして正確に答えてね。今日二十四時間以上起きてる？」

犬神はぼかんとした、警官が聞くような事では到底無かった。確かに犬神は昨日の夜から文化祭の準備のために徹夜で作業したため二十四時間以上起きてはいた、だが警官がそんなことを知ってどうするのか？ 最近の警官は市民の健康状態もチェックするのだろうか？ 疑問が膨らみながら犬神は考えた。

「うーん、思い出したかな、これが最後の質問でこれを答えてもらえたら解放するからちゃんと答えてね」

警官は笑いながらこちらの返答を待っている、犬神は自分を包んでいる空気に耐えられなくなって、解放してほしさに答えた。

「昨日からずっと徹夜で寝てません。もう帰っていいですか？」

犬神が答えると警官は、笑い始めた。真夜中なのに人目も周りの迷惑も省みず、大声で、盛大に、狂気と狂喜を交えながら。

「あははははははははははははははは、グッド、エクセレント、マーベラス、最高だね、うん、最高のモルモットだ、やっぱり私は運がいい、やはり月の輝く夜には幸運が降って来るね。あははははははびやびややはあひやあ」

警官とは思えない狂った笑い声、というより人間かどうか怪し

い。目の前の狂った笑い声を繰り返すものに犬神は、恐怖が危機へと変わったのを感じ急いで、振り返って逃げだした。さっきまでピクリとも動かなかった足は、さっきの金縛りが嘘のように軽快に動き始める。自分が走れていることに、安堵しながらとりあえず警官から離れようと、犬神は行き先も何も考えずに走った。

「あーあ、逃げちゃった。いけないな、どうも集中力が切れると能力も切れちゃうな、もう少し練習しないと……」

警官は彼を追いかけるようとはしなかった。ただ、腰にぶら下げた拳銃を取り出して、ゆつくりと、必死に走る犬神の背中、いや、体の中にある心臓に狙いを付けていく。その拳銃は普通の警察官の持っているものとは違った。まず第一に大きい、犬神は気づかなかったが、日本の警察に許可されている銃と比べふた回りほどは大きかった。次に弾が特殊な形をしていた。カプセルのように二つの部品を組み合わせたような形状だった。そして、その銃が心臓という狙いと重なった時、銃声が響いた。

空気を引き裂く轟音が響いたとき、犬神の体に銃弾を撃ち込まれた、犬神は自分に弾が当たった事より、銃声が響いた事に驚いた、そして、振り向くなと頭が命令しているのを無視して、警官の方へ、振り向く。警官は相変わらず気味の悪い笑顔を向けながらこちらに拳銃を向けていた。撃たれたのか！？ そんな事を頭で考え始めた時ようやく痛みが体から伝わってきた。

「痛っっ！」

小さく呻きながら自分の胸のあたりの痛みが体を支配し始める。すぐに犬神は痛みには耐え切れず倒れこんだ。その光景を確認した後、ゆつくりと警官がこちらに近づいてくる。犬神はなおも必死で逃げようと体を這わせながら移動しようとするが、大した距離も稼げなかった。

「うーん。どうやら無事に心臓に当たったみたいだね。銃弾も貫通してないし完璧だね」

警官のセリフに絶望的な気分になった犬神はなつた。

「心臓！、俺は死ぬのかよ」

どんなフィクションでも心臓を撃ち抜かれたらまず助からない、現実ならなおさらだ。犬神は徐々に意識が薄らいでいくのを感じた。「あはははっは、逆だよ。心臓だから死なないんだよ。それに僕はキミを殺す気なんてこれっぽちもないよ」

笑って手でこのサインを作りながら楽しそうに話かけてくる。明らかに狂人のそれである。テンションはハイ、闇夜に笑い声が響きわたっている。

「それに僕はいったよ質問に答えてくれたら、解放すると」

「解放！？ どこがだよ、完全に殺しにきてるじゃねーか、畜生、それとも介抱でもしてくれるってのか！」

「違う違う、僕は君たち人間の窮屈な世界から解放さしてあげるって言ってるのさ。人間の世界からの解放、つまり、生まれ変わりさ、さあ次に目を覚ました時キミの世界は変わっているよ。そして最高に楽しもう。キミは「新しい世界」というより「見え方の変った世界」で好きに行動してくれ、一ヶ月後に経過を見にくるよ。それでは良い夢を」

そういつて警官は、今度はとてつもなく小さな銃で犬神を撃った。撃たれた犬神は何かを言いたそうに口をパクパクさせながら意識を失った。

「明日はちょうど満月だな」

警官はそう呟いて、夜空を見上げた。

「もうすぐ会えるといいね、かぐや姫。ひやはあああびやはああはははあっあっはあ」

そして、真夜中に銃声が響いたというのに誰も様子を見に来ない明らかな異常な状態の中、男は再び狂ったように笑いながらたった今自らが撃った少年を担ぎその場を去った。

## 日常とのズレ

「ぎゃああああ」

犬神は絶叫しベッドから起き上がった。

悪夢からの目覚めは得てして救いではある。ただ、彼の場合は新しい災厄を同時に引き寄せた。

「お兄ちゃんキモイ」

悪夢から目覚め、恐怖から戻ってきた、犬神白夜を迎えたのは、妹の罵倒とやたら威力のあるグーパンチだった。

「いたたた」

鼻の頭をジャストミートされ苦しく呻いた犬神は、周りを見渡した。そして自分が部屋のベッドで寝ていたこと、妹が朝起こしに来たことを確認した。そしてそれと同時に昨日の夜の事を思い出す。自らの幼馴染を家まで送り届け、その帰りにおかしな警官に出会ってそれで……。

犬神は自分が拳銃で撃たれた事を思い出し、背中を手で探る。何の傷も痛みも感じなかった。だが昨日の出来事が夢とは犬神には思えなかった。あの、死を覚悟させるような恐怖が今もハッキリと思い出せた。とりあえず、気のすむまで確認を取ろうとした犬神は妹に背中を向けて服を脱いだ。

「マイシスター。俺の背中に傷みたいなものない？」

妹から何の反応も帰ってはこなかった。犬神は妹の方に振り返ると妹は顔を真っ赤にして、こぶしを握りしめ、おおよそ妹が兄に向けるような眼ではなく、汚らしい害虫を見るような眼でこちらをみて、

「死ね！変態iiiiiiii」

と振り向いた兄の顔面がくぼむほど素晴らしい右ストレートを叩きこんだ。そして犬神はベッドへと再び眠りについた。二度寝は蜜の味というけれど、本日の二度寝は血の味がする二度寝だった。

「何寝てるのよ」

「ぐはっ」

眠りにつこうとした犬神は、すぐさま妹に腹を二キックされた。おはようからお休みまで面倒を見てくれる妹に、なんとも言えないかわいさを感じながら目覚めた。先ほどの悪夢からの目覚めと違って、今度は気持ちのよい目覚めではあった。多少体が痛いけれど……

「お兄ちゃん、朝だよ。ご飯できてるから、早く食べよう」

妹に催促され、体を起こすそして落ち着いて全身を見て見ると服装は昨日のまま、それに家に帰った記憶はない。あるのは、警官に体を撃たれた記憶だけ、だけどそれはどうやら夢のようである。ならどうやってここで寝ていたのか？

「マイシスター。俺って昨日ちゃんと帰ってきた？」

「いや、家の前で倒れてたよ、チャイムならして玄関でぶっ倒れてたよ。もう、いくらお酒飲んでるからってあそこまでたどり着いたなら部屋まで頑張つてよ、私ここまで運ぶの大変だったんだから」

妹の健気な行動に感動しながら、もう一度記憶をたどる、家の前までたどり着いた記憶はない。ちなみに犬神は、今まで何回も酒を飲んだが酒を飲んで記憶が飛んだ事はない。

「ありがとう、マイシスターお前はいつだってやさしいな」

「キモイよお兄ちゃん」

そして今度は妹の蹴りをこめかみにもらった。ぐらりと犬神の視界がぐらつく。

「あれ、俺感動して泣いてるのかな、お前の姿が、歪んで見えてきたぜ」

馬鹿なセリフを言いながら、犬神は自分の部屋から出て行った。そしてリビングに向かう途中に自分の服をもう一度見るどこにも穴など無く増してや血の痕すらない。どうやら完全に夢の中にいたらしい。ようやく昨日の出来事に納得のいく決着をし、妹の作った朝食にかぶりついた。

「うまいよ、マイシスター。最高だ」

犬神は自らの妹が作った朝食を褒めて褒めてほめちぎった。

「お兄ちゃん、毎朝同じこと言ってる、ボキャブラリー増やそうよ」  
妹はうんざりした顔をして、兄を見つめる。兄は妹を喜ばそうと、新しい褒め言葉を考える。

「このベークンエッグは味の宝石箱やー」

これを言ったとたん兄妹の中にさむーい北風が駆け抜けた。

「ゴメン。お兄ちゃんに何かを望むことが間違ってた」

朝一から犬神は妹を失望させたようである。犬神自身もかなり落ち込んでいた。怒涛の勢いで食べていた朝食が、さっきの一言から全然減らなくなった。そこまで妹をがっかりさせたことがショックだったらしい。

「あとそれとお兄ちゃん昨日みたいにあんまり遅く帰ってきたらだめだよ。お父さんもお母さんもないからって遊んでばっかだとなくな大人にならないよ。それにお兄ちゃん今年受験でしょ勉強しくちやだめだよ」

犬神家の両親は一年前から外国へ仕事に行っている。ちょうど犬神が卒業するころには帰って来るらしいが、今のところ両親は外国から一度も帰って来ることもなく、兄妹で協力しながら暮らしている。もともと妹は両親と一緒に外国に行く予定だったのだが、妹が日本がいいと駄々をこねたため、一人暮らしの夢は破れて、二人で過ごしている。

最初は妹がいない方が何かと好き放題できると思っていたが、今では妹がいてとても感謝している。妹は家事を素晴らしい手際でこなしていき、親がいた時となんだ変わらない生活を兄に供給してくれていた。当然兄も手伝いはするが、いかんせん手伝うと妹にうざがられるため、力仕事以外はすべて妹に任せるようになった。

「わかってるよ。もう文化祭も終わったし、これからは勉強に専念するよ」

妹は頷くと、一足先にご飯を食べ終わり食器を流しにつけると自分の部屋に学校へ行く準備をしにいった。犬神も朝食を食べ終わる

とさつとシャワーをあびて、着替えて家を出発した。家を出る頃にはどうやら妹はもう学校に向かっていたらしい。

「暑いな」

九月の終わりという時期ではあった。だが、十分にお日様は仕事をしており、残暑が厳しい日々が続いていた。風のない日だと汗が止まらないなんてこともざらだった。犬神は暑さにうんざりしながら学校までの道を歩いて行く。校舎の中まで入ってしまったえば冷房が体を冷やしてくれる。それまでの我慢なのだが、暑いのが苦手な犬神にとっては十分すぎる拷問だった。

「おはよう」

後ろから聞きなれた声が聞こえてくる。犬神が後ろを見ると幼馴染の綾芽が涼しい顔をしながら歩いていた。綾芽が部活をしている時は朝練のため一緒に登校することはなかったが部活が終了してからは、たまに一緒に登校することがある。

「お前は暑くないの？ 俺は太陽が憎くなるほどしんどいんだけど」  
全身からだるそうなオーラをだしながら、隣を歩く美少女に話かける。まあ、周りから見ればどう見ても釣り合っていない。冴えない男と美女のコンビ、どうしてあの二人が一緒に歩いてるんだ？と疑惑の目で見られている。目立つのが嫌いな犬神はやや歩く速度を速めた。

「まあ私は暑いのは平気だから。寒いのは苦手だけど」

「俺と反対だな。冬は全然大丈夫だけど夏はつらいね」

綾芽は犬神と話をしながら歩いて行く、一方犬神は一步一步進むたびに汗をかいていた。

「みんな元気に登校してくるかな、みんなかなり飲んだから案外ヤバいかもね」

「大丈夫じゃね。なんだかんだで一番飲んだのは綾芽だし。それにしてもあちいい」

「そればかりだね。もうちょっとで学校だからがんばって」

「がんばってる人間に『がんばって』は禁句だからな。頑張っても

どうにもならないんだよ」

犬神が汗を滝のように流しながら、歩いていくとようやく学校へと続く最後の坂道へとたどり着いた。ちなみにこの坂道はかなりきつい角度の坂で自転車通学の生徒もこの坂では自転車を押して上っている。

「今日こそこの坂を制覇してやる。いくぜ」

たまに自転車部でもない奴が最後まで漕いで行こうとしているが、犬神が見た結果は全て同じだった。

「今日も失敗だあああ！」

途中まで坂を漕いで行くのだがそこから全く進まなくなり逆走して坂の下にあるゴミ置き場に盛大に突っ込んで行く。ちなみに過去に一度だけでもう少しでゴールだった所を見たこともあるのだが、目の前で風が吹いて女子生徒のパンチラをみて鼻血を出しながら落ちて行ったこともあった。その時の彼の一言は「もう少しでゴールだと思ったなら視界が真っ白になった」だった。きっと彼がゴールする日は遠いであろう。

教室につくとすでに冷房が効いており、犬神は至福の表情を浮かべながら自分の席にもたれかかった。

「生き返るぜ」

犬神は自分の机の中にいつも入れっぱなしの勉強道具を取り出し、下敷きで自分を煽ぎながら辺りを見渡した。みんなどうやら休むことなく登校しているようだった。ただ顔を見ると全員疲れ切った顔色をしており、どうやら昨日の宴会の疲れが抜けていないようだった。

「やっぱりみんな疲れてるね」

隣の席の綾芽が犬神に向かって話かける。犬神は若干苦笑いを浮かべながら答える。

「昨日一番飲んでた奴がピンピンしてるのにみんな情けないな」  
ただクラスの間は酒を飲んだ後、カラオケに行っているから、その疲れもあるのかもしれない。そして昨日の事を考えて、大事なことを思い出す。

「なあ、綾芽。俺って昨日綾芽を家までちゃんと送ってるよな」

「何その変な質問？ちゃんと家まで送ってもらったと思うけど」

「俺その時大分酔ってた？」

「ううん。私と比べて、意識は大分しっかりしてたと思うけど」

「だよな。うん。やっぱりあれは夢じゃないのか？」

「ねえ。何の話してるの？」

綾芽は犬神を何やら心配そうな目で見つめながら、犬神に向かって詳細を聞こうとする。

「いや、別に大したことじゃないんだ」

けれども犬神は何でもないという風に、話を切ろうとした。だが、綾芽は引き下がらない。

「何の話なのか、ちゃんと答えてよ。気になるじゃん」

犬神はしまったと思った。綾芽が興味を持った事は真相まで辿りつかないとあきらめない。

「昨日あのあと何かあったの？」

「何もないと思う、だけど何かあったのかもしれない、だけど、普通に考えるとやっぱり何もないね」

「なに、そのすごく優柔不断なセリフ！ ギャルゲの主人公の共通ルートの時のヒロインに対する反応みたい」

何となくすごく不名誉なのか、うらやましいのかわかりかねる例えられ方をされていた。いやそれより。

「っていうか、お前ギャルゲーすんの！？」

幼馴染の見てはいけない趣味を覗いた気分になり、犬神と綾芽の間に、かなり気まずい空気が流れた。数秒二人が空気と共に固まったあと、大きく綾芽が咳払いをして再び話始める。

「まあ、白夜クンの知っている事を全部教えてもらうから」

どうやら綾芽のギャルゲープレイヤー疑惑は追及してはいけ  
ないらしい。

「まあいいけど、きつと信じられないと思うな」

「いいから話さない」

どうやら早く話を進めていかないとけないらしい。そのため、  
犬神は昨日綾芽と別れたあと、変な警官に会って、妙な質問を受け、  
そして、警官の拳銃で撃たれて、目が覚めると自分の部屋で、妹の  
話では家の玄関の前で倒れていたという、普通に考えれば酔って変  
な夢を見ていた。だけで片がつく事を綾芽に話した。案の定彼女も  
「悪い夢でも見たんじゃない」といつて、話を全て聞くと興味を無  
くしてしまった。犬神自身も疑問は解消こそしなかったが、無理や  
り納得することにした。

そうしているうちに授業が始まった。犬神の通う学校は進学校当  
然授業はそれなりにレベルは高く、キチンと受けなければやってい  
けない。まあ、犬神は成績はいつもギリギリでテスト前に綾芽にテ  
ストに出そうな部分を教えてもらいながらやってきているため、彼  
自身は、もはや受験のための授業になっている今の時期の授業はも  
うどうでもよくはなっていた。

犬神は進学する気はあまりなかった、というより進学できる頭を  
持っていなかった。無論学校を選ばなければ、入れそうなところは  
あるのだが、名前のない三流私立に行くぐらいなら就職した方がま  
しだと思っていた。なので、推薦で地元の国立大学に落ちれば、親  
が紹介してくれる会社に就職することになっていた。

今の授業は数学のセンター試験の過去問のプリントを授業中に解  
けというものだった。ただ犬神にはさっぱり分からなかった。とい  
うか問題の意味すらつかめない。第一、数学なんて名前が付いてい  
るのに、最近じゃアルファベットを使う事の方が多いじゃないかと  
くだらない事を思いながら、とりあえず回答欄に、2を書いて埋め  
ていった。今までの統計学上2が答えになる確率が一番高いのであ  
った。今日は何点になるかなと数学を冒読するような解き方をし、

クラスで一番に問題を解くと犬神はそのまま眠りについた。

本日の授業は生徒の弱点把握のためのセンター過去問を解かすがほとんどだったため、犬神は得意な教科はすばやく終らせて寝て、苦手な教科は諦めて寝るということを繰り返した。

現在の時刻は昼休みである。本日は木曜日、両親が共に外国に行っているため、犬神に昼休みに食べる弁当はどこにも無い。そのため、毎日購買でパンを買って食べるという行動を繰り返していたのだが、親が外国に行ってから半年を過ぎたころから幼馴染が毎日木曜日だけお弁当を作ってくれているのである。

犬神はそのことに大変感謝していた。決して、学園のヒロインである綾芽の料理が食べれることを喜んでいるのではなく、作られた弁当が大変おいしいから喜んでくれるわけでもなかった（味でいえば妹の料理の方が十倍おいしい）。犬神が喜んでいたのは弁当の量である。綾芽は毎回木曜日に犬神に向けて用意する弁当は重箱五段である。内訳は一段目丸ごとご飯、二段目サラダ、三段目揚げ物系、四段目魚料理、五段目肉と野菜の炒め物。毎回多少の変化はあるが、たいていこれだけのものを用意してくれている。

そして、この中身はほぼ全て犬神一人のためだけに作られている。綾芽は綾芽で小さめの弁当に普通程度の量の弁当を自分用に持っており、現在重箱は犬神の机の上に広げられ、綾芽の弁当は彼女の膝の上に乗っていた。

「サンキュー綾芽。じゃあ早速、いただきます。」

そう言っただけで犬神は所狭しと自分の机の上に並べられた弁当に箸をつけた。

「よくかんで、ゆっくり食べてね」

綾芽も犬神の顔を見ながら自分の弁当を口に運んでいった。犬神は彼女のセリフを無視して、掻き込むように弁当に喰らいついた。

初めて弁当を綾芽が用意したときは弁当はこれほど豪華なもので

は無かった。もともと、犬神が「購買のパンに飽きたから妹に弁当作ってって言ったら『何で中学生の私が駄目兄貴のために朝早く起きなきゃいけないのよ。寝言は寝てから言って』って言われたんだよ」と綾芽に向かつて愚痴を言い、綾芽が「なら私がつてあげるよ、毎日は無理だけどね」と言って作つたのが始まりだった。

そして、作られた弁当は非常にかわいらしいものだった。クラス、いや、学校中の男達が憎悪と羨望のまなざしで犬神を見つめているなか、弁当を食べ終えた犬神の第一声は「量が少ない」だった。綾芽が「ゴメン、でも味はどうだった？」と弁当が完食されていることから、きつといい返事がもらえろと思ひながら聞くと、「まあ、不味くはないよ」と犬神が答え、次回から重箱で大量のおかずとご飯が用意されることになった。

ちなみに犬神はこの後、学校中の男達にボコボコにされ、女子の最低な男ランキングの首位におどりでていた。

「おいしい？ 白夜クン。今日の炒め物とかは、先週のと違って微妙に味を変えてみたりしてみたんだけど」

毎度恒例となった食後の味の批評である。犬神は毎回重箱の弁当と料理を完食はしているのだが、こう聞かれると常にこう答えた。

「普通だね」

その一言に綾芽は少ししょんぼりしながら、重箱を片付け始める。かなり残念で報われない姿だった。いつそ食べられないほど不味ければ彼女は幼馴染のために朝早く起きて弁当を作ろうともしなかったのだろう。犬神をうならせるようなおいしい弁当なら、毎回犬神に「おいしい」と言わせるためにネットでレシピや味付けを調べて頭を悩ませることも無かったのだろう。毎回の如く「不味くはない」、「普通」とだけ返されてそのたびに『二度と作ってやるものか』と綾芽も思ふのだが、犬神も用意された重箱の中身は米粒一つ残さず完食しているため、綾芽もがんばって「おいしい」と言われるまで料理を続けようとしているのだった。

「そう言えば、一年のクラスの一人が行方不明になってるって知ってる？」

片付けを終えた後、互いの席に座りながら、綾芽が犬神に向かって問いかける。

「いや、初耳だけど？ どうせ昨日の打ち上げではめをはずしすぎて、どっかお外で居眠りでもしてるんじゃないの？」

「私も噂で聞いたただだからあんまり詳しく知らないんだけど、その子打ち上げの後「忘れ物を取りに学校に行く」って言って友達と別れたあと居場所がつかめないんだって。もしかしたら学校の幽霊かなにかにさらわれたんじゃないかって、みんな言ってるよ」

「オカルトかよ！ あんまり興味ねーよ俺」

この手の話題は常に女子の独壇場だ。女は怖いものが嫌いといいながら結構な確率でホラーが大好きである。知り合いが何人も彼女とホラー映画を見に行つて眠れない夜をすごしていることを犬神は知っていた。

「それより、行方不明になってる奴って、男、女？」

「女の子だけど」

「じゃあ、絶対街で悪い男に引つかかって大人の階段上つただけだよ」

とんだかいだん違いだ。犬神はうんざりしながら机の上に突っ伏した。

午後からの授業も寝て過ごす時間はたっぷりとあるのだから昼休みくらい起きて話を続けられいいのだが、この男は興味の無いこと以外は基本寝て過ごす。そう考えると、学園祭のときはほぼ不眠不休で働いていたのが嘘のようである。

「ちよつと！ まだ話の途中なのに勝手に寝ないでよ」

「何だよ、まだ何かあるのかよ」

「さっきの日本史の答え合わせしよう」

綾芽はニコニコしながら犬神の方を見ていた。犬神は数学と英語

以外なら割とできるほうだった。

「パス。めんどい」

けれども、犬神は綾芽の提案をぶった切った。犬神の成績なら日本の日本史の問題なら十分に八割の正解を狙えるので、学校でもトップクラスの成績を誇る綾芽と答え合わせをしても十分話にはついていけるはずだった。けれど、肝心の本人のやる気が皆無だった。

「つれないなー！」

口をとんがらせながら綾芽が言う。その言葉を聞いた白夜は少し怒りながら反論する。

「三回に一回ぐらい俺のほうが点がいいならやってもいいけど、今までの人生でお前にテストの点で勝ったことねーじゃん。俺の頭が悪いことの証明をこれ以上積み重ねても意味ないだろ」

「別に勝ち負けはどうでもいいでしょ。大事なのは間違えたところをキチンと理解して次に繋げることだよ」

「たまには勝利という飴を与えてくれないとやる気もおこらねーよ」そしてそのまま白夜は不貞寝をした。前日徹夜をしていたからというだけでは説明がつかないほど、体が睡眠を求めている。

「もう放課後だよ」

幼少のころよりずっと聞き続け、耳になじんだ綾芽の声が聞こえて白夜は目を覚ました。どうやら昼から放課後までずっと眠っていたらしい。

辺りは夕日に彩られ、全てが赤く色付いていた。

「大丈夫、白夜くん？ 体調悪いの？ ずっと眠り続けてたし」

幼馴染は机に突っ伏している白夜の顔を覗きこみながら話しかけてくる。

「……大丈夫だよ。少し疲れてただけだから」

白夜は眠そうに目をこすって答えるが、同時に不安も覚えた。徹

夜をしたことは何度かあったがこれほどまでの眠気は感じたことが無かった。

「あんまり昼寝しすぎると夜眠れなくなるよ」

「あんまり子供扱いすんなよ。十分眠れるよ。今この場でもう一度眠りたいくらいにな」

幼馴染の忠告を話し半分に流し、白夜は鞆を持って下校の準備を始めた。もうクラスに残っているのは二人のみだった。

外に出て並びながら帰って行くとグラウンドで野球部たちが練習している。白夜達の学校の野球部はそこそこ強いのだが、甲子園に出場できるほどではない。それでも毎日熱心に練習していた。

「がんばってるな、野球部」

「そうだね。私たちも勉強がんばらないとね」

そこまで言う綾芽は多少顔を赤くして白夜の方をまっすぐ向いて話しかけた。

「あのさ、今日夜家で一緒に勉強しない？ 白夜クンのわからない問題全部教えてあげるよ」

白夜にとっては願ってもない提案ではあった。二週間後には中間テストが控えてあることを考えれば、今のうちから苦手な科目はつぶしておきたいと考えてはいた。ただ、二日続けて夜家を空けると妹にがみがみと言われる気がしていた白夜は少し悩んだ。

その時、辺りに快音が響き、野球部の練習していた方向からライナー性の打球が一直線に白夜達の方角目掛けて飛んできた。

「危ない！」

野球部全員が声をそろえて白夜達の方へ叫ぶ。その声に反応した白夜は目の端に打球を捕らえた。

（どこが危ないんだ？ 止まって見えるほど遅い打球じゃないか！）  
周りの目から見れば非常にスピードに乗った打球だったが、白夜の目にはコマ送りに見えるほどゆっくりとしたスピードでこちらに向かってきていた。だが、肝心の打球に到着地点にいた綾芽は全く反応できていない。白夜もさすがにスピードが遅くても硬球が当たれば痛いだろうと思い、すばやく綾芽の前に回りこみ野球部のスラッガーが放った会心の当たりをいとも簡単に素手で受け取った。

「えっ！」

危ないという声にだけ反応し、体を硬くしていた綾芽は飛んできた打球を素手で受け取った白夜の行動に驚いた。そして続けて彼を心配する声をかける。

「大丈夫！？ 怪我してない！」

彼女に声をかけられた白夜本人は全く持って平気だった。素手で打球を受け取った時点で打球の威力が大したことが無くても相当のダメージがあるはずである。しかし、白夜本人は痛みを全く感じていなかった。そして何事も無かったかのように、受け取った打球を野球部の方へ投げ返した。

「大丈夫、大丈夫。あの程度の打球で怪我なんてしないよ」

なおも心配してくる綾芽に向かって手を見せながら白夜が答える。綾芽も白夜の手を確認するが多少赤くなっている程度で特に腫れている様子も無いことがわかった。

「白夜くんが運動神経いいことは知ってたけど、ここまですごいとは思わなかった」

「別にあのくらいの打球なら誰でも反応できるだろ」

改めて帰路に就き始めた二人は先ほどの出来事について話し始める。

「いや無理だよ、すごい勢いでこっちに向かって来てたよ！ あん

なの驚いて硬くなるしかできないよ」

「それは言いすぎだろ、現に手も赤くならないヒョ口球だったぜ。大したことはなかったんだよ」

「それが不思議なんだよね。どんなに威力が無かったとしても、もつと派手に手が赤くなってもいいと思うんだけど」

「昔悪戯と喧嘩のしすぎで手の皮が厚くなってたんだよ」

そう言つて一旦この話を切り上げる。もうすぐ綾芽の家の近くである。

「あつ！ 思い出したけど今日どうする、家に来る？ 夕飯だつてご馳走するよ！」

綾芽が髪を振りまきながら振り返り、もう一度少し顔を赤くしながら白夜に提案する。

「ちなみに、夕飯は誰が作るの？」

「私だけど？ だつて今日お父さんもお母さんも仕事でいないし」

最後に行くに従い声が小さくなる綾芽の返答を聞き白夜は即座に結論をだした。

「今日は家に帰るわ。妹も二日連続で夜一人にしたらさびしいだろうし」

白夜は表面上そうは言つたが、綾芽の飯より十倍おいしい妹のご飯を選んだだけであつた。これが、綾芽のお母さんが作るのならばきつと白夜はお邪魔していたのだろうに……

「わかつた。それじゃあ、白夜くん、ちゃんと勉強しないと駄目だよ。バイバイ」

やや残念そうな顔をしながら綾芽は手を振つて自分の家へと帰つていった。

そして白夜は自宅への道を進んで行き、昨日警察とであつた場所で足を止めた。

道路には血痕も葉莢も落ちてはいなかった。第一に辺りには住宅が立ち並び、銃声なんてものが響けば騒ぎになるはずである。

「やっぱり夢だったのかな」

そう呟きつつも気が付けば手に汗を握っていた。どうやら体はあの夜の恐怖を本物として認識しているらしい。

「馬鹿らしい」

夢にビビッている自分自身にイラついて、白夜は頭を振りながら自宅へと帰った。

## ムーンウォーク

「うまいぞ、マイシスター。やつぱりお前の料理はサイコーだ」

夕飯時になり白夜は、帰宅した妹の料理を手伝って出来上がった料理を食べながら妹をべた褒めしていた。

「お兄ちゃん、鶏肉ばっか食べてないでちゃんと野菜も食べなきゃ駄目だよ」

「うーん、お兄ちゃんピーマン嫌いだけど、いとしのマイシスターのために食べてやるぞ」

そう言っただけで妹の作った鶏肉とピーマンと玉ねぎの炒め物に手を伸ばしピーマンを食べる。

「お兄ちゃん、玉ねぎもちゃんと食べてね」

気が付くと白夜の皿は何故か玉ねぎを無意識によけていた。

「あれ、一緒に食べてたつもりだったんだけどな？」

そう言っただけで玉ねぎを口に運ぼうとするが、何故か体がストップする。

「どうしたのお兄ちゃん？ 別に玉ねぎ苦手じゃなかったよね」

「そうだけど、なんだろう。体が食べるなって命令してるみたいで動かないや……どうなってるんだ！？」

玉ねぎを箸につかんで口の前でストップしている白夜は手が震えており、額からはおびただしいほどの汗が流れていた。段々と顔色も青白くなってきた。

「お兄ちゃん大丈夫！？ 別にそこまでして無理に食べる必要ないよ」

「ゴメン、マイシスター。俺の分も食べておいてくれ。俺はもうご馳走様だ」

そう言っただけで白夜は青白い顔のまま箸をおいて食べ終えていた。ご飯と味噌汁の茶碗を片付けにいった。

「お兄ちゃん具合悪いの？ お兄ちゃんがお茶碗一杯でご馳走様す

るなんて異常だよ。年金の未納を指摘している議員が実は未納だった時ぐらい異常だよ」

「つまり、良くあることじゃねーか！ 俺は夜はそんなにいつもいつも喰ってないよ、マイシスター」

白夜自身、きつと昼食を過ぎた所為だと納得しながら二階にある自分の部屋へと戻って行った。

ベッドに横たわり天井を眺める。昼間にあれだけ寝たからであるうか、今の白夜は全く眠さを感じなかった。今夜は寝れそうもないなと思いつつながら、寝返りを打つ。

ふと窓を見ると、夜だというのに非常に明るい光が差し込んでいた。

「そついや今日ぐらいが、満月だったっけ」

そう言いながらながらベッドから立ち上がり、窓際へかけより窓を開け放つ。正面には真ん円に輝くお月様が空に腰を下ろしていた。ドクン！

月を見た瞬間、白夜の中で何かが弾け激しい鼓動に襲われる。

「がっ！」

鼓動と共に体中に痛みとも快感とも取れない奇妙な感覚が駆け巡る。声を出そうとしてもうまく出せない。まるで体が作り変えられるかのように、今までの人生で繋げた神経を一旦ズタズタに切り裂かれ、よりよく繋ぎなおされる感覚。

「があぎやああ！」

叫び呻いた。頭からもう一人の自分がい出てくるかのような痛みが駆け抜け、目から涙を流す。頭を必死に何か打ち付けたくなくなるけれど一行に収まらない痛みにただただ、無意識に暴れまわる。

体の変化に耐え切れず白夜は叫び同時に窓から外へ飛び出した。

どこかへ向かおうとしたわけでは無く、力の限り叫び、魂の赴くまま暴れそうな場所を目指し駆け出しただけだった。

屋根から自分の家の塀へ飛び移る。そしてそのまま道路に降り立

つた白夜は叫びながら駆け回る。

周りから見れば狂人の行動ではある。白夜自身どうして走りまわっているのかわかつてはいない。けれど、頭ではなく体が、脳ではなく魂が、白夜に対して命令する。暴れ回れと。

走るうちに、もっと疾くしなやかに走る方法を体が探し始める。

白夜は二本足で走るのを止め四本足で地を駆け始める。

次に体を包む服が鬱陶しく感じ始める。それと同時に体が大きく膨らみ始めるのを感じる。体中が毛で覆われ始め本当に人間とは違う生物になっていく。白夜が体の変化を感じてからほんの数秒後、服ははじけとび体が大きく膨張しサッカーゴールほどの体格になる。「ウォーーン！」

白夜は全身を真っ白な毛で覆われた巨大な化け犬と化し、空に輝く月に向かって大きく吠えていた。

白夜はそのまま馬鹿でかい体に似合わない猛スピードでひと気の無い街を全速力で駆ける。新しく得た力を確かめるように。遠くに見えた風景が一瞬で目の前に迫る感覚を味わう。スピードはそこいらの車などでは相手にはなりそうも無かった。

次に白夜は見え始めた廃墟のビルに向かって飛びつく。軽くビルの五階部分まで飛び上がり足をかけると、そのまま一気にビルを駆け上る。一步一步がワープでもしているかと思うほどのスピードが乗りすぐさま廃ビルの屋上までたどり着く。

「ウォー……ン！」

もう一度 燦然と輝く満月に向かい大声で吠える。ビルの屋上で吠える姿は、今まで高校生として毎日を送っていた「犬神白夜」では無く、新たに化物として夜の世界に踏み込んだ「人狼」としてのそれだった。

「うるさいわよ、その馬鹿犬。人の縄張りにどかどかと踏み入れ

て大音量で吠えてるんじゃないわよ」

自らの力に酔い我を失っていた白夜は罵声を浴びせられ、ようやくこの廃ビルに先客がいることに気が付いた。

白い狼と化した白夜は声のした方向を振り向く。そこには、金髪を三つ編みにして後ろにながしたかわいらしい少女がいた。少女は現実離れ、いうなれば漫画の世界からやってきたかのように整った顔立ちをしており、つぶらな瞳がとてもかわいかった。

そんな少女を見た白夜は無意識に一步引いていた。少女がこんな廃ビルにいることに驚いて一步引いたのでは無く、化物の姿をしている今の自分の姿を見ながらも平然と声をかけてきたことに驚いたのでもなかった。

単純に言えば、生き物としての格を一瞬で思い知らされたのである。彼女は何故自分が今まで気付かなかったのか不思議なほど、自らが虫けらと思えるほどのオーラを纏っていた。きっと、人間のままなら、彼女を人間と捉えてそのまま接していたであろう。アリの獅子を恐れぬように。けれど、今の白夜は化物の世界に踏み込んでいる。目の前にいるどう見ても少女としか思えない存在が自分より遙か高みであることを本能的に悟っていた。

（戦ったら殺される）

すぐさま、その場から自らの保身のために逃げようとする。だが、一步を踏み出そうとした瞬間後ろから死神にささやかれる。

「……まさかその馬鹿犬、このまま逃がしてもらえんと思ってる？ 甘いわよ、さつきあんたがいきなり吠えるから取って置きの一匹だったショートケーキを落としちゃったのよ。万回殺してあげたいところだけど、まあ、千回程度で許してあげるからこっちに来なさい」

その言葉は年相応の甘い声ではあった。けれど決して冗談には聞こえず、白夜はそこから一步も動けなかった。

「どうしたの馬鹿犬、吠えるのやめたらとたんにびびっちゃってるの？ 可愛がつてあげるからこっちいらっしやいよ。まあ、来ない

なら私から行くけどな」

そう言って目の前の少女はこちらに無防備に向かってくる。

（やられる前にやってやる）

追い詰められている白夜はある判断を下す。無防備で向かってくる少女に一撃を与えてそのまま一目散に逃げるという作戦である。白夜にも目の前に無防備に向かってくる少女に一撃を浴びせることぐらいはできると思い始めていた。

それは新しく得た力の所為か、それとも冷静になればなるほど目の前のかわいらしい少女が自分がビビルほどの脅威ではないという人間的思考が復活したためかはわからない。けれど、意思是固く固まり始めていた。

「グルルルっ！　ワォーン」

喉を鳴らし一度大きく吠えると、目前まで近付いていた少女に飛び掛った。

「あらら、少しいじめすぎたかな。まさか飛び掛ってくるとはね。まあいいわ、躰の時間よ。『伏せ！』」

一瞬声の調子が変わりやけに迫力のある声が響いたと思うと、白夜はその声とほぼ同時に地面に叩きつけられた。無論自分の意思とは関係なくである。

「キャウン」

情けない声が響き、地面に叩きつけられた白夜が前を見る。目の前には先ほどと変わらず少女がこちらに歩いてくる。

（何されたんだ！？　彼女は俺に触れてないし、俺も触ってはいない）

目を白黒させながら白夜は少女を見つめた。彼女は年に似合わない慈愛に満ちた表情と、地面に這いつくばっている惨めな生き物を見下す視線を合わせながら白夜に向かって話しかける。

「おびえさせちゃったね。ほら怖くない、怖くない」

彼女は手を出して、白夜の頭の上に持っていく。そして

「なんて言うと思った！？　馬鹿犬！」

思いつきり広げた手のひらを握り閉め、頭を本気で殴ってきた。  
白夜は凡そ少女の力とは思えない力で殴られ、硬いコンクリートに  
もう一度叩きつけられる。

「キャン!?」

予想外の一撃に驚き白夜は目の前の少女が自分を許す気がないこ  
とを悟る。そして、一撃殴った後もおも彼女は白夜の頭を殴り続  
ける。もうすでに白夜の頭は廃墟のビルのコンクリートに沈み始め  
ていた。

（殺される!）

死の恐怖が体を包み、同時に痛みも感じなくなり始める。そして、  
数十回殴られたあたりで、一旦毛をつかまれ床に埋まっていた頭を  
強引に上げさせられ、目の前にいる少女と目が合う。見るもまばゆ  
い金色の目だった。

「どう、こんだけやったら少しは反省した? これに懲りたら人里  
になんか出ずに、さつさと山に帰りなさい。街になんか出たら、日  
本みたいな国でもハンターが出てくるわよ」

さつきとは違い、諭すような口調で化け犬の白夜に話しかける。

「ぎゅんわんじゃい」

狼の状態となり人の言葉を喋れない白夜は、それでも懸命に謝罪  
の言葉を吐こうとした。もしこれ以上攻撃されればそれこそ本当に  
死んでしまう。

「へっ!?!」

けれど、白夜の賢明な謝罪を聞いた少女が見せた感情は驚きだっ  
た。目の前の化物が人のような言葉を喋ったことに少女は信じられ  
ないという風な表情を白夜に向かって見せる。そして、頭をひねり  
ながらもう一度考え込む。やがて、少女は納得したかのようにこち  
らに向かって話しかける。

「馬鹿犬、これからの質問に正直に答えなさい。まずは喋れるよう  
にしてあげる。『人語を喋れ』」  
「わかりました」

さつきまで、全くもって人語を喋れなかった化け犬（正しくは人狼なのだが）はそれまでが嘘のように人語を喋った。

「あっ、俺喋れてる」

「当然よ。私が命令したのだから。それよりも、早速質問よ」

少女はさつきまでの怒りとおふざけを纏った雰囲気と打って変わって、いたって真面目に話しかける。

「ワン」

「返事はハイよ」

「ワンワン」

「ハイは一回って、ハイですらない！……まあいいわ、あなたはいったい何者？ 山犬の類の化け犬じゃないの？」

少女はあきれながらも、白夜に向かって話しかける。

「いや、俺は人間だった。でも今日突然月を見たら知らない間に走り回って気付いたらここに……」

白夜自身言っと思って出す。自分は人間だった、今日までは確実に狼の姿になっていた今の今まで全く問題視していなかったが、自分が化物の姿でこの場にいること事態おかしいのだ。

「俺はどうして、なんでここに。どうしてこんな姿に」

白夜は自分の現状を確認すると急に恐ろしくなる。今の自分は化物で、戻れる保障なんてないのだ。

「『落ち着きなさい』まずは現状がわからないとどうにもならないわ」

彼女がまた一瞬声の調子を変えて白夜に命令する。その言葉で白夜はパニックになり始めていた頭が落ち着いていくのを感じた。

「あなたはこれまで、こんな風に化け犬になったことなんてなかったのね？」

「ワン」

「だから、ハイだって……まあいいわ。次の質問、あなたは満月を見て化物の姿になったのね」

「ワン」

「まさか、人狼なのかしら？ この日本じゃ縁がないモンスターの  
上にとくに絶滅していたと考えていたけど」

少女はその幼い顔に似合わず渋い顔つきで悩み始める。

白夜自身彼女の会話に飛び出した「人狼」という言葉に反応する。  
狼男として、西洋のモンスターストーリーなんかではよく登場するモ  
ンスターの一つである。

「なあ、俺は、元に戻るのか？」

「その問いは、簡単に答えられない。第一、人狼なら人狼に噛まれ  
でもしないかぎり突然人狼になるなんて考えにくいし、第二に人狼  
は普通半人半狼が普通でしょ？ でも今のあなたは完全に狼の状態  
になっている。私も本物の人狼を見ているわけじゃないからはつき  
りとは言えないけど、人狼じゃない可能性だって十分にある」

白夜はどんどん落ち込み始める。もしかしたら今までの生活には  
もう戻れないのかもしれない。

「とりあえず月が沈むまでわからないってのが本音よ。まあそれほ  
ど落ち込むこともないわよ。たとえ化物でも私は殺したりしないし」

さっき自分を千回殺すと言って本当に殴りまくった奴が言っても  
説得力がないと思った白夜だった。

「さっきだって、たまに人里に下りてくる馬鹿な山犬に人里が恐ろ  
しいって事を教えてあげるために、やっただけよ！」

俺がジト目で少女の方を見ていると、少女は怒って弁明してきた。  
「じゃあ俺って完全にとばっちりじゃん」

「そうね。一応あやまってあげるから。ドウモスイマセンデシタ」

完全に片言で誠意のせの字も無い謝罪を聞きながら、不安そうな  
顔で白夜がもう一度少女に尋ねる。

「俺はどうしたらいいの？」

「そうね、まずは安全な場所に移動して、今日をやり過ごすことを  
考えなさい。そのまま人間に戻れたらとりあえずはOK。戻れない  
なら、山に永遠に暮らすことになる」

いたって真剣に彼女が答える。

「安全な場所ってここは安全じゃないの？」

「残念ながら馬鹿が騒ぎすぎたし、私も能力を発動しちゃったしね。いくら日本みたいな国でもここに長居しないほうがいいでしょ」

彼女はそう答えると自らの履物をきちんと履き直した。そして、白夜に向かって手を差し出してくる。

「まあ、とりあえずはそんなに心配しなくて大丈夫よ。たとえハンターが来ても守ってあげるし。じゃあ、とりあえず自己紹介。私の名前はレイル」カーミラ。あなたは？」

「俺は犬神白夜」

そういつて差し出された手に白夜はチョコンと自らの獣と化した手を重ねた。端からみたらただのお手だった。

「わかったわ。じゃあ、シロって呼ぶわね」

「ワン。じゃ無くて……やだ！」

白夜は大声でレイルの提案を拒否する。

「そうね、片方が一方的に呼ぶのも駄目よね。よし、シロ私のことは『御主人様』と呼びなさい」

「ワン。御主人様」

白夜は全く意識せずに目の前の少女を御主人様と呼んでいた。

「って、何で俺は御主人様なんて呼んでるんだ！？ そんな気は全く無かったのに」

「ゴメンなさい、シロ。無意識に私の能力が発動していたみたい。まあ能力を解く気はないから早くなれることね」

誤る気など微塵も無い笑いをこちらに向けると、全く悪びれることも無く平然と言い放った。

「それでは夜の世界にようこそ！」

この夜に白夜はレイル」カーミラと出会う。それは深い闇を歩くための光となったのか、深い闇の深淵にいざなわれる畏だったのか

はこの時は誰も知らない……

ふぁーすといんぷれっしょん（前書き）

ハンターサイドのお話です

ふぁーすといんぷれっしょん

八神昌真<sup>やがみ しょうま</sup>は緊張した面持ちで空港の滑走路の脇でぽつんと立っていた。

本来一般人が入ってはいけない滑走路の近くまで侵入している青年にはある役目を押し付けられていた。ヨーロッパから派遣されてくる超A級の重要人物二人を無事に自分達の本部まで連れてくることだった。

「はぁー、やだな。何で僕がこんな役目なんだか」

ため息をつき、ばやきながら腕時計を確認する。時刻は午後三時派遣されてくる人達の祖国ではティータイムだった。

「紅茶でおもてなししなくちゃいけないのかな？ 僕はコーヒー党なんだけどな……」

ぼやいていると視界の端に小型のジェット機が入ってきた。教団が所持している航空機である。

航空機を見たたん八神は姿勢を正し、昨日から何度もシミュレーションしていた歓迎方法を思い返す。

そうやって八神が復習を開始したすぐに、航空機は滑走路に降り立った。あたりに轟音が鳴り響きすさまじい風が吹き荒れるが、八神はピクリともしなかった。

やがて空港関係者が搭乗者を下ろすための移動式の階段を設置した。そして、機体から二人の人間が降りてきた。

先頭を歩いてきたのは、黒い神父服を着た背の高い中年のやせ気味の男だった。ただ気になるのは、神父にしては目が死んでいて、髪もボサボサ、階段を降りてくるときもだらしくあくびをしていた。そして何よりいびつなのは、背中に神父服には絶対に似合わないバットケースを背負っている事と、アルファベットの筆記体のような文字がびっしりと書かれた大きな目のボールのようなものを杖代わりにしている事だった。

続く二人目は至って真面目そんな表情をしており、黒い修道服に身を包んでいた。ただ頭巾は被っておらず、長い茶髪を後ろでまとめていた。見た目は少女と言っても差し支えない年齢で恐らく十代後半ぐらいであろう、けれども、落ち着いた雰囲気と端正な顔立ちで気品が溢れ、美しいお嬢様のようなであった。彼女は体の正面に両手で大きな書物を抱えていた。多少年季の入った書物を彼女は非常に大事そうに抱えていた。

「ないすとうみいちゅう、ふぁざースミスあんどシスターテレサ」  
八神は昨日から必死に勉強した英語を披露した。発音は最悪なことから察してもらえそううれしいが、八神は英語がてんで駄目だった。

「日本人が英語できないってのは聞いていたが、ひどい発音だな」  
八神の目の前にやってきた神父は微笑を浮かべながら日本語で八神に話し掛けた。当然英語で返されると思っていた八神は目を丸くする。

「えっ！？ 日本語わかるんですか？」

「いや本当なら全くわからんが、教団お得意の裏技を使っている」  
そう言って神父は右手の小指につけている指輪を見せた。小さな指輪の面積にこれでもかというほどの文字が並んでいた。

「なるほど、術式ですか」

八神は納得しそのまま神父の後ろに立っているシスターの指を見る。彼女にも指輪がついていることから、会話について困ることが無いとしり八神は安堵のため息をついた。

「おかげで駅前留学しなくてすみそうです」

「いや多少は練習しておいた方がいいとは思うがな君の発音だと自分の名前すら伝わらないぞ。ところで自己紹介といこうか、私はジョセフ・スミスだ。スミス神父とも呼んでくれ、後ろに居るのは私の相棒の――」

「テレサです。私は呼び捨てでかまいません」

さっきまでずっと黙っていたシスターは前に一歩でて八神に向か

って話し掛けた。

「いえいえ、僕がかまいます。シスターテレサと呼ばしてもらいます」

八神は手を振りながら呼び捨てなんてトンでもないというポーズをとって答える。今日始めて出会った二人は、教団の中では知らない人はいないほど有名だった。

教団と呼ばれる組織、それは他の宗教組織とは少し違った形で存在していた。

「化物達を殺しつくす」、化物の存在を認めてはいない教団が掲げる目標としては矛盾しているが、その目的のために数々の人材と資金を集め活動しているのが八神たちが所属している組織だった。

その中で日夜トレーニングに取り組み、日夜化物達を殺し続ける実行部隊を通称ハンターと呼んでいる。八神の目の前にいる二人はハンターとして第一線で戦い続ける英雄として語られていた。何よりもすごいのは、化物達の中で王に等しい存在としている吸血鬼を十数人相手にし無傷で戻ってきたという話である。神父は最後には逃げ惑う吸血鬼を追い掛け、一匹ずつ狩って行ったことから『ハウンド獵犬』、シスターの方は神父のサポートしかしてなかったが、彼女が現れるということは同時に神父が登場することを指すので『バッドガール災厄修道女』と呼ばれ教団の中に知らないものは誰もいなかった。八神自身だ**いぶ噂は誇張されてはいる**と思っていた。ただ、吸血鬼を殺したことは事実だと聞いてはいるので、**すごすぎる存在に萎縮して自分みたいな若造ハンターが彼らの相手をしていいのかという不安があった。**

「えーと、じゃあ最後に自分ですね。僕は八神昌真といいます。八神とお呼びください」

その言葉を聞いて神父が右手を差し出す。慌てて八神も右手を差し出し握手をした。

「よろしく、八神君」

空港を出るととりあえず同僚が待機している車に乗り込み、日本の教団の本拠地へと向かった。

日本に対する教団の力は非常に弱い。日本古来の陰陽師がいるからである。最近では陰陽師の力は弱ったが、日本にいる妖怪やモンスター達も暴れ回ることも少なくなり、教団が無理に出しゃばることも無く現在に至っている。

「八神、お前は今回何故俺達がヨーロッパから極東の地まで出張することになったか知っているか？」

「いいえ、僕は聞いてませんけど」

八神は昨日突然二人が来ることを聞かされてから不思議に思っていたことを、当の本人であるスミス神父から聞かれた。

「やっぱりな。実は俺達も詳しく知らないんだ」

「えっ！」

車内にいた同僚と共に驚く。

「そうなんだよな。当の本人がどういう任務かわかって無いんだ。いつだって教団は矢面に立つ人間に不親切だよな」

さして不満がありそうでもなく神父はそう言いつける。シスターは相変わらず古そうな本を握っていた。

「そこでだ、私達も教団にささやかなる反抗をしようじゃないか」

口の端が不気味につりあがる。逆らえない重圧が車内に満ちる。

八神は生唾を飲み込む。

「教団の金を使っておいしい物でも食べに行こう」

車内に張り詰めた空気が一瞬で崩壊した。

「駄目ですよスミス神父。僕達の任務はお二人を迅速に本部へお連れすることなんです。寄り道を許可できるわけが無いです」

八神は若干怯えながらも反論する。本来なら口出しなどできる立場ではないのだが、自分の任務に支障で出ることを許可などできない。

「えー。せつかくの日本なのに、八神君は私達に飯も与えてくれないというのかね。私達の母国の飯はもう不味くて食えたもんじやないんだよ」

「ですが……」

グー。

八神と神父の言い争いが始まりかけたその時かわいらしい音が車内に響く。無論お腹のなる音である。

「スミス神父、今教団に飯を用意してもらうのでそれまで我慢してください」

「いや、さっきのは俺の腹の音じゃないぞ」

八神は運転手を見る。運転手もこちらを見て首を横に振る。つまり残っているのは……。

「お腹が減りましたね」

マイペースにシスターが答える。どうやら彼女もお腹が減っていたらしい。

「テレサもこう言ってるんだ。有名店に連れて行けとは言わないからどこかで飯を食おう」

八神と同僚の運転手は顔を見合わせる。仕方が無い。

「了解しました。……あそこに車を止めてくれ」

そう言って道路の脇に車を止めてもらう。そこは東京で超有名ラーメン店のすぐそばだった。さすがに今の時間帯なら人も減り空いていた。

八神とシスターと神父が車を降りる。神父はわざわざ肩にバットケースをかけ直し、バールのようなものを杖代わりにする。実際端から見ればおかしいな杖に見えないことも無い。そしてシスターも大きな本を持ったままである。

神父は目の前にある有名ラーメン店を感動して涙を流しながら見ている。

「八神君、キミは口ではああいつつも私達にすばらしいものを食べさせるつもりだったんだね。ネットでみたよ、日本のラーメンと

いう物は非常にうまそうだった。私も一度食べてみたかったんだ」  
神父は狂喜乱舞しながらラーメン屋へ向かおうとしている。……  
彼は本当に神父なのだろうか？ 現在の所食い意地の張った中年である。

「はあっ？ 何言ってるんですスミス神父？ 僕達が行くのはこっちですよ」

八神はラーメン店の隣にある、ファーストフード店を指差す。Mのマークが目立った、全国どこるか世界チェーンのファーストフード店である。

「何！ 何を馬鹿なことをいつてるんだ。わざわざ日本にまで来てこんなジャンクフードを私達に食べさせるつもりか！」

「落ち着いてくださいスミス神父。ファーストフードなら車の中で食べれるでしょ」

八神にしてみれば最大限の譲歩ではあった。しかし、遠路はるばる来た神父がジャンクフードで妥協できるはずも無かった。

神父は大人げ無く八神を思いつきりにらみつける。周りにいる人の目も気にせずに。

「スミス神父、ファーストフードでいいじゃありませんか。私は早く食べたいです」

シスターは相も変わらずマイペースに発言すると一人店内へ入っていった。

「うぐぐぐ、今回だけは妥協してやる。覚えていろよ八神君。食い物の恨みは恐ろしいからな！」

不気味な捨て台詞と共にシスターの後を追ってファーストフード店に入ってしまった。

「ツイてないな。だから嫌だったんだけどなこんな役目」

八神は空を仰ぎ見ながら呟いた。

気落ちしたまま店内に入る。

「店内のハンバーガーあるだけ持つてこい！」

神父が騒いでいた。いい年した神父が何をしてるんだか……。シスターもシスターで騒いでいるパートナーの隣で慌てずに自分の分の注文をしていた。

「もうやだ、この任務」

開始から一時間も経たずに泣き言を言い始めた八神の任務であった。

店内から出るとき神父は片手で持てるだけのハンバーガーを抱え、八神は顔が埋まるほどのハンバーガーとシスターの注文した料理を抱え、シスターは変らず本を抱えていた。

異色の三人組に周りの注目を嫌でも集めていた。

「もう、わがままはやめてくださいねスミス神父」

「わかったよ」

先ほど暴れ回って多少気が晴れたのか、素直に頷いてくれた。

「だが、帰国するまでに絶対うまい物を食わ——」

不意に喋っていた神父の声が止まる。そして、手にしていたハンバーガーを道に落とす。中身が数個道路に転がる。

「何やってんですか神父！？ 食べ物こそま——」

「テレサ、一分以内に結界を張れ、それ以上は待たない」

八神の声を無視し、先ほどまでのふざけた声色とは打って変わって迫力で地面が震えそうな声でシスターに指示をだす。シスターはというと神父が声をかける前から本を広げていた。

「『それ隠れたるものの顕れなく、秘めたるものの知らぬはなく、明らかにならぬはなし』、日常を生きるものと我らを互いに『拒絶せよ』」

シスターの詠唱と共に本が輝きあたりの風景が固まり始める。

「ちよっと、何やってるんですか！ 術式なんて発動して、こんな街中でやりあうつもりですか！？ 下手したら一般人が——」

まだ敵すら確認できていない八神は慌てて二人に声をかけるが、八神の言葉はすでに神父には届いてはいなかった。神父はバッドケースをおろし中からボールのようなものと同じように文字がびっしりと書き込まれた鉄パイプを取り出していた。

「キヤー！」

その姿を見てあたりの人が声をあげ始める。人の往来のなかでバッドケースからいきなり鉄パイプを取り出したら悲鳴を上げられて当然である。だがじきに悲鳴も収まった。結界が完全に当たりを包み、一般人と彼らを隔離したのだ。

結界の中では、何の音も影響もこちらには与えないけれど風景や人物は存在はしている。けれども、結界の内側での破壊行動（たとえば結界の中にいる人間を殺すなどの行動）は結界の外側には反映されない。つまり暴れ回っても現実世界には影響はないとされている。だが、結界は必ずしも万能ではない。結界が考案されてから多くの検証が行われた結果、術式の構築や術者が未熟な場合、結界の内部破壊が外側に影響されることがわかった。これが物などで済めばいいが、人が巻きぞいで死んでしまえば冗談ではすまない。そのうえ、普通は三人ほどで張る結界を今回はたった一人の術者が張っており、さらに現在真昼間の街中である。大量の人間の中で戦闘を行おうとしているのだ。

八神が慌てていると同じように慌てている奴がいた。

「お前らはなんなんだ！？」

それは二十代後半の青年だった。会社勤めの最中なのか、スーツに身を包んでいた。

「あいつでいいんでしょ」

「ビンゴだ」

シスターはこの結界の中で教団一行以外で唯一言葉を発している人間を指差し神父に声をかけ、神父は目を血走らせながら両手にそれぞれボールと鉄パイプを握って戦闘態勢になっていた。

結界の内部に取り込まれたものは同じように結界の内部にいる者

のみに影響を与えることができる。このように狙っているターゲットを結界内部に取り込み結界内で始末するのがハンターの現在のやり方である。けれど、今回のこれは無理がある。というより危険すぎる。

「ちよつと、待ってください。こんな強引な方法を取ったら結界の外に影響がある可能性がある。第一、一人でしかも一分足らずで作り上げた結界にそんなに精度があるとは思えない！」

八神がヒステリックに叫びながら神父を止めようとする。けれど、先ほどまでの駄目神父の姿はそこには無く、ハンターとなった男がそこにいた。

「だからなんだ？ 私には百人の犠牲より一匹の化物の命を奪うことのほうが意義があるんだ。それに一分も待ってやったんだ、一般人に影響が出たらシスターの責任だろ」

そう言つて、この結界に誘われた男を殺しに神父は走り出した。迫り来る神父の姿を見て青年は怯えながらその場から逃げ出していた。

「シスターも止めてください。もし被害がでたらただでは済みませんよ！」

けれど、シスターはいつもどおり落ち着いていた。

「無駄よ、八神くん。あの人が化物を見つけたら、殺すまでいかなる犠牲を払おうともやめはしないわ。まあ今回は大丈夫よ。私が結界を張ってるし、相手も弱そうだし」

「うう——」

言いたいことはいろいろあったが八神はこれ以上は無駄だと感じ、ターゲットを追い歩いていった神父を八神は追いかけはじめた。

（何が『獵犬』だ！ こんな街中で殺り始めるなんて、どう考えても『狂犬』だろうが）

愚痴を頭に浮かべながら必死に神父の後を目指して走った。

ふぁーすといんぷれっしょん（後書き）

いきなり、もう一人の主人公を出してスイマセン  
ですが、優しく見守ってくれると有りがたいです。

not guilty けれども罰を

神父はあっさりと逃げていった青年を路地に追い詰めていた。神父は手に持ったバールのようなものと鉄パイプを叩いて音を出しながら青年に迫っていく。

「いい加減人間の姿でいるのをやめたらどうだ？ 化物が人間の姿をしているのを見ると虫唾が走るんだ」

「頼む見逃してくれ。あんたらあれだろ！ 陰陽師とかだろ。確かに俺は人間では無く『鬼』だが今まで人間の害になるようなことはせず、人間の社会にきちんと適応して生きてるんだ。今だって俺は就職して仕事をしているところなんだ。信じられないなら、ずっと監視をつけてもらってもいい、だから見逃してくれ」

青年は必死になって命乞いをする。目は真剣で嘘をついているようには見えない。事実彼の言っていることは本当であった。

「だからなんだ？ お前が人様に迷惑をかけないから見逃してくれ？ 関係ないな！ 私はな、そんなことどうでもいいんだよ。ただ単に化物を殺したいだけなんだから」

そう言って、青年の目の前まで近付くと思いつき鉄パイプを振り上げて青年の足目がけて振り下ろす。

バキッ

小気味よく木でも折ったかのような音が響く。当然折れたのは木では無く骨であり、響いた音もすぐさま本人の叫びでかき消される。

「ふいぐいぎやつああ——」

「うるさいぞ」

神父はそう言い、痛みを精一杯伝えようとする青年の口をバールでぶん殴った。悲鳴は一瞬とまり、今度は青年の裂けた口から血と共に声にならないうめき声が聞こえた。

「おいおい、さっさと化物の姿になれよ。さすがに人間のまま殺したら後味悪いだろ」

神父は笑いながら足が折れて跪いている青年を見下しながら言う。  
青年もキツつと相手を睨み付ける。それと同時に額から角のよう  
なものがせり出してくる。

「そうだ！ それでいい！ じゃあ早速だが、死んでくれ」

神父がそう言い、止めを刺そうと鉄パイプを振り上げて、ためら  
い無く相手に振り下ろした。

だが、やられる一方だった青年も今回の攻撃はすばやく反応し受  
け止める。

「もう、しらねーぞ。一体どっちが化物だ！ 人の話も何にも聞か  
ずに殺そうとするなんて。お前なんか殺してやる！」

青年が覚悟を決めると頭の角に続きドンドン体が変化していく。  
筋肉が膨張しその所為でスーツが破れてはじけ飛んでいた。

そして、右手で鉄パイプを握ったまま三倍近く太くなった左手で、  
神父を容赦なく殴りにかかる。

神父はすぐさま右手の鉄パイプを手放し、後ろに飛んで鬼の姿に  
変化した青年の攻撃をかわした。

「はっははっは、ようやく本性のお出ましか！ じゃあ、ちょっと  
ばかし、私も本気を出してやるよ」

笑いながら神父が左手に持ったボールを手で遊びながら真正面に  
鬼を迎える形になった。

鬼の方は変化してから、人間の姿でいたときの傷が急速に回復し  
ていた。砕けた足も回復したのか、もう相手は立ち上がっている。

鬼は相手から奪った鉄パイプを振りかぶりながら神父に向かって  
一直線に向かっていく。

この時鬼の方は多少の反撃は気にしていなかった。鬼自身に高い  
再生力がありその上身体能力で言えば自分の方が圧倒的に上である。  
多少の傷を負っても押し切れると考えていた。

だが、この考えは甘すぎた。なんせ相手はヨーロッパでよく知ら  
れた、モンスターハンターである。鬼とは比べ物にならないほどの  
再生力を持ったヴァンパイア相手に一步も引かなかった男である。

反撃の隙など与えてはならなかった。

受け止めるだけで手の骨が折れそうな青年の振りかぶった鉄パイプの一撃は、あっさりと神父がボールを使って受け流した。そのまま神父は彼の懐に入り込み右足で彼の左膝をくだくようにして踏みつけた。

ぐしゃり、という肉と骨がつぶれるような音が鈍く流れた。確かに彼の体を支えていた二本の足の内一本が、地面へと叩きつけられて、通常では考えられない、明らかに異常な方向へ曲がっていた。

「ぐおおー」

そのまま大きくなった体を支えきれず倒れる鬼。だが彼自身はすぐに怪我が回復すると思い、次の神父の一撃に備えて頭の中から激痛を取り除き懸命に神父の動きを目で追った。

神父は大して表情も変えずその場で立っていた。ほんの少し鬼の反撃を警戒していたようだが、鬼が反撃してこないと判断した瞬間当たり前のことのように倒れた鬼の右膝も神父は右足で踏みつけた。先ほど潰した左足と同じような鈍く嫌に耳に残る音を残し鬼の右足も潰された。同時に鬼の叫びが響いた。

「とりあえず、これでよしだ」

神父は鬼の両足を潰すと、懐からタバコを取り出して一本咥え火をつけた。

「さあ、これでお前の命はこのタバコとおんなじだけになったわけだが、何か言い残すことは？」

神父はいたって真面目な顔で動けなくなった鬼に向かって問う。

「なにがだよ。俺はまだ死んでいないぞ。それにこの程度の怪我すぐに回復して――」

「術式って奴を知っているか？」

鬼の言葉をさえぎって神父が聞く。

「なんだそれ？ 陰陽師が使う術のことか？」

「非常によく似ているが少し違う。術は才能のある人間にしか使えないし、構築もできない。だが、術式は術をあらかじめ物などに書

き込み定着させることによりほとんどの術を術者なしで使えるようにしたものだ。結界なんかは、状況ごとに術を多少変化しないといけないから、使う人間は術を使えることが必須なんだがね」

神父はタバコを吹かしながら、話を続ける。

「私は普段から持ち歩いている術式が三つある。内二つは私の武器であるボールと鉄パイプだ。ただこれには大した術式は書き込まれてはいない。『強化』という初歩的な術式で鉄パイプとボールを壊れにくくするだけのものさ」

鬼は話を聞きながら、自らの回復を待っていた。けれどもいつこうに足は回復していかず、潰されたままであり、激痛がわが身を襲っていた。

「……ただし、ただしだ！ 最後の一つはすごいぞ、術式『不治』。高度の術式のため、聖人が愛用したものを利用して書かなければならないほどだ。そして、それを書き込んだのであるのが、私の右足だ」

神父はズボンをずり上げ、右足を露わにする。足にはびつちりと赤い文字が皮膚に書き込まれていた。

それを見て、鬼は顔が青ざめていく。

「理解したかな、哀れな鬼よ。キミの足は二度と元には戻らない」

「——うああ！ 嘘だ！ 嫌だ、嫌だ死にたくない、死にたくない。俺が何したっていうんだ。何にもしてない。俺はただ、人の世界で生きていきただけなのに」

神父が冷たく残酷な答えを突きつけると、鬼は暴れ出す。だが、かまわずに神父は続ける。

「残念だ。たとえばキミが人間で卑劣なテロリストだとして、無関係な大勢の命を奪ったとしても、私と私の信じる神はキミを許しただろう。たとえばキミが人間で最悪なペドフィリアだとして、小学生を監禁、殺害したとしても私と私の信じる神は迷える子羊の行動として許しただろう。だけど、キミは化物だ。そんなことは神もお許しにならん」

そう神父が告げたときタバコの灰が地に落ちた。神父がタバコを

持っていた携帯灰皿に入れて火を消した。

「それではさようならだ、青年。来世に期待しろ。……いや私の宗教には輪廻転生の考えはなかったな、残念」

「……この化物め！」

最後に鬼が怨念をこめて言う。

「化物？ いや違うね、人間さ」

そして、神父は鬼の頭を右足で踏み潰した。頭を潰された鬼はそのまま体が青い火に包まれた。

「鬼火か……」

神父は青年の体が青い炎によって灰になるのを見届けて、鉄パイプを拾いシスターの所へ帰ろうとした。そこには今日あったばかりの日本の教団の一員である、八神昌真が立っていた。

八神は自らも銃を抜き、神父の援護を行うことで周りへの被害を最小限にしようと考え神父の元へ向かったが、目の前で見たのは、強靱な肉体を持った鬼が立ち上がることもできずにただただ神父に見下されている光景だった。化物を意にも介さずあっさりと倒す力、命乞いをする鬼に向かって一切の慈悲なく殺害する冷酷さ。教団の本部から差し向けられたハンターは平和ボケしていた自分達とは格が違うことを思い知らされた。

「もう終わったよ八神くん。さあ早くシスターの所へ帰ろうか。私もお腹がすいて仕方が無いんだ」

八神に笑いながら気軽に声をかけてくる神父。先ほどまで化物と真剣に対峙していたときの表情が嘘のようだった。けれども声をかけられた八神の方は煮え切らない表情のままで神父に話しかける。

「いくつか、質問があります」

「うん？ なんだい」

「先ほど退治した鬼がひと気の少ないこんな路地ではなく、結界の外に影響があるかも知れない、ひと気の多い場所で暴れていたらど

うするつもりだったんですか？」

神父はその問いにタメ息をつきながら答えた。

「愚問だよ、八神クン。どこであろうと私は化物は殺すのみだ。それにテレサは信用できる結界士さ。彼女が今まで結界のことで失敗したのを見たことが無い」

「そういうことじゃない！ 一般人を巻き込む可能性があったのにどうして戦ったんだ！」

敬語も忘れ八神が叫んだ。神父はその叫びを聞きながら遠い目をして答える。

「私はね、八神クン。化物の存在が許容できないんだよ。神話の話でさえ怖気が走り、小説ならば登場シーンを全て破り捨てたくなるほどにね。だってそうだろう、この世界は人間のものだ。断じて化物達が我が物顔で歩いていい世界じゃない」

神父の言動に若干押され気味に八神が更に聞く。

「そのためには一般人の犠牲も仕方がないと……？」

「ああ、そうだとも八神クン。私は化物が人間を殺すことは許容できないが、人間が人間を殺すことは許容できるんだ。つまり、私が人間を殺すことには耐えられる。ゆえに戦闘での犠牲は全て私が殺したこととして受け止めているよ」

悲しそうに神父が喋る。

彼は壊れている。八神はそう感じ、これ以上の議論をやめた。それと同時に右手の銃を強く握ってある決意を固める。万が一この国で化物と人間を天秤に乗せた神父を止めるのは自分であると。

「わかりました。スミス神父。とりあえず車に戻りましょう」

そうして二人はシスターのところへと戻ってくる。シスターは二人を確認すると、神父にバッドケースを渡した。

「早く鉄パイプをしまってください。もう疲れたので結界を開放したいのです」

シスターはマイペースに述べる。そして、神父が鉄パイプをしまった途端、シスターが開いていた本を閉じた。それと同時に街の音

が再び聞こえてくる。

周りを見渡すと別に混乱も起こっておらず、結界を張る前に叫んでいた人もいなかった。

別に結界を張っていても時間の流れまで遮断しているわけではないので、きつと結界を張る前の騒ぎは無かったこととして処理されたのであろう。そして、結界を張るのと同じくらい難しいとされている結界を解く行為も辺りに何の混乱もないことから完璧に行われていた。

日本で何人もの術者が精一杯手を尽くしてやつのことで張られるべき結界を突然しかもわずか一分足らずで完璧に張っていたことに八神は驚いた。

（これが本場のハンターか……。僕の知っている連中とは比べ物にならない。教団はこんな連中を日本に送ってきて何をするつもりなんだ？）

どう考えても現代になり活動もおとなしくなっている日本の妖怪たちに向けられる敵としては役不足である。

「みなさんどこ行ってたんですか？ 探しましたよ」

車に残っていた同僚が車のすぐそばに立っていた八神たちを見つけて声をかける。

八神は神父たちが道路に落したハンバーガーを拾ってそのまま車に乗り込んだ。何かあったのか？ と同僚に聞かれても全て無視して。

車は走り出した。目指す場所は教団の日本支部。それと同時に今回A級ハンターが送られてきた真意をなんとかしてでも知ろうと八神は心に誓った。

## What to do and why (前書き)

シスターの年齢を十代後半に変更致しました。  
スイマセン。

## What to do and why

ハンバーガーショップから数十分で街中ある普通のビルの前で八神たちは車から降りた。

神父はバールを腕に引っ掛けて、ハンバーガーの袋片手になおもハンバーガーを食べ続けており、シスターは初めて会ったときと変わらずに本を両手で抱えていた。

「こつちです。ついて来てください」

八神は二人を先導していく。教団の日本での本拠地は街の真ん中にある。それも傍目から見ればただの高層ビルだ。そしてそのビルには、教団とは何の関係もない企業が多数入っている。

八神はそんなビルの中を明らかに風変わりな格好をした二人を誘導して、三人でエレベーターに乗せる。

先ほどの事件のあとずっと機嫌の悪い八神は仏頂面のままエレベーターの緊急ボタンをためらい無く押す。

「緊急センターです。なにかトラブルでもあり——」

「『真理を証するもの三つあり、すなわち天然と人と聖書』」

スピーカーから聞こえて来る声をさえぎって八神が言う。するとエレベーターはパネルには表示の無い地下に向かって動き出した。

「ふーむ。日本支部は地下を拠点にしているのかい？ 精神衛生上よくないと思うのだが？」

「気にしないでください神父、目立たない場所を選んだだけですよ。日本の教団は肩身が狭いですから」

顎を触りながら神父が八神に話しかける。どう考えても精神に疾患を抱えている『狂犬』にだけは言われたくないと思った八神だった。

この国にもかつて妖怪と呼ばれる大量のモンスターがいた。そのモンスターを退治する一部の陰陽師達が戦国時代の宣教師達との密

約により教団の日本支部が発足した。

しかし、妖怪達は明治以降急速に姿を消していった。妖怪たちは人間の世界に混ざり込む道や減り始める自然とともに朽ちる道を選び始めたのだった。

そうになると、次に問われるのは教団の日本支部の在り方である。各国に存在する教団は基本的には政府と深いつながりを持っており、教団の掲げる「化物根絶」に賛同するスポンサーから多大な援助を持っているのが普通である。

だが、日本支部では政府からないがしろにされ、資金の援助も集まらないお荷物的な存在だった。

「君はハンバーガは食べんのかね？」

スミス神父は大量のハンバーガーの一つを八神に差し出す。けれど、何も言わずに身振りで断った。スミス神父は不満げそうに八神に差し出したハンバーガーを自分の口の中へ運んでいった。

八神はずっと考えていた。この辺境の地にA級ハンターを送り込んで一体何をするつもりなのか？ 彼らの様な爆弾まがいな人材を送り込まなければならぬような化物がこの日本にいるのだろうか？

とりあえずは日本支部の上司の話を聞かなければならない。場合によっては力づくでもだ。

難しい顔をしていると、チーンという音が鳴りエレベーターがようやく止まる。

「こちらです。ついてきてください」

八神は先行して二人を教団の会議室へと連れていく。教団の中ですれ違う同僚達はみな珍しい外人に好奇の目を向けていた。

「うーん。どうやら私は日本人にはやけにモテるみたいだな！ みな足を止めて私の方を見てくるぞ！」

さぞ嬉しそうにスミス神父は言う。けれども、機嫌の悪い八神はお世辞を言う事なく直球で返答した。

「単に珍しいだけですよ。外国人が」

「何！」

「えっ！」

スミス神父とシスターテレサが同時に驚きの声を上げた。そして二人は同時に顔をうつむけ落ち込んだ。

（シスターも思ってたのかよ！ わからないなこの人達は）

日本支部のハンターとして八神が憧れたA級ハンターはとおってもお茶目で、とっても壊れていた。

「つきました」

大きな扉のある部屋に着くと八神はそのまま壁をノックし返事も待たずに中へ入った。

中は大きな机が置いてあり、上座に一人の老人が座っていた。

年齢は軽く還暦は超えており頭には毛の一本も生えてはなかったが、その目付きは年齢に比べても十分に覇気があり日本支部の最高責任者としての風格を漂わせていた。

「わざわざイギリスからこんな極東の島国までようこそお越しくださいました」

男は座りながら神父とシスターに語りかける。

「いやいや、日本に来るのは楽しみでね。この国に関しては何の不満もないさ」

「私も別に不満はありません」

神父とシスターが返答すると嬉しそうに老人は微笑み、口を軽やかに走らせ始めた。

「いやいや日本を気に入っていただけてありがとうございます。日本の文化は他の国から見れば不思議にあふれています。いろいろと体験してもらいたいものです。かく言う私も昔貴殿の国に仕事で言った時には鼻をすすっているだけで怒られて、「さっさとハンカチでかめ」なんて言われて「ハンカチは手を拭くためのものだろ」っ

て言い返したら信じられないといった表情で「馬鹿をいうな、ハンカチは鼻をかむもので手を拭くものじゃない。あんな鼻水がついた布で拭けるか!」と言われて国が違えば些細なことでも常識が全然ことなるのだなとしみじみ感じたものです。もしかするとあなた達にもいろいろと不快な思いをさせてしまうかもしれないが、そこは一つご容赦を頂きたいと思う。ちなみに、会議終了後に日本料理を食べに行こうと思っているんですが、どうでしょうか？ ちなみに日本では中華や洋食なども本国などとは大分味付けが異なっています。だから、日本での中華や洋食を食べるのもなかなか面白いと思いますよ。そしてですね……」

長い！ 得てして老人の話は長引くものではあるがどうでもいい話を長引かせるのは辛いものである。そんな空気に耐えかねたのか、話を遮るように神父が咳払いをした。

「ゴホン！ えー、日本食を食べに行くという件に関しては是非ともお願いします」

「まだ食べるんですか!」

神父がそろそろ会議の本題について催促してくれと思っていたのに、出てきた言葉が食事の同意だったことから、思わず八神が突っ込んだ。

というより山のようなジャンクフードを平らげた後でよく食事の話ができるものである。

「あー、私も御一緒にしたいです」

シスターも手を上げて同意した。その言葉で八神は今日だけで何度目かわからない心労を感じた。

コイツらの感覚にはついていけない。

「有栖川司教、スミス神父とシスターテレサに自己紹介と今回の任務の説明を始めてください」

ボヤボヤしていたらいつまでも話が始まりそうに無かったので、八神が強引に話を前に進めさせる。

「そうだな、そういえばまだ自己紹介すらしておらんかったな。私が日本支部の最高責任者である有栖川龍元<sup>やがみりゅうげん</sup>だ以後よろしく」

そう言って手を差し出すと二人はそれぞれ握手しながら自らの自己紹介を行った。

自己紹介ののち、ようやく有栖川司教が今回の主題について話し始める。

「今回あなた方業界の有名人に来てもらったのは、ある情報が手に入ったからだ。君たちは『血の円卓同盟』は知っているかね？」

「私は知らん」

スミス神父は頭を横に振って否定し、シスターは頭を立てに振って私は知っているとアピールしていた。

「君はどうだね、八神くん」

有栖川司教が八神に話を振り、八神が答える。

「その昔、教団の力がヨーロッパ中に広がり化物狩りに躍起になっていた時に生まれた吸血鬼達の同盟ですよ」

八神の答えに有栖川司教は大きく頷いた。

「そう。教団の力に危機感を覚えた吸血鬼達の同盟だった。プライドの高い吸血鬼達をまとめるために上下関係を一切排除し、一人のモンスターをシンボルとして祀<sup>まつ</sup>った。そのモンスターを見たものは一瞬で自らの非力を悟り膝まづき頭<sup>こぶし</sup>をたれたという」

「ちよつと待ってください。僕は血の円卓同盟のシンボルの話は知りませんよ！」

話の途中に八神が割り込む。血の円卓同盟自体はわりと知られている話である。吸血鬼達の団結のせいで教団との全面戦争へと発展し、ヨーロッパの地図から幾つかの村が消え、政府が国民よりもモンスターの殲滅を優先していた教団自体をモンスター同様恐れ始め、政府とのつながりが多少グシャクし始める。そののち、教団内部からも人命第一という考え方の幹部が増え、次第に教団は力を衰え始めたというものである。

けれども、血の円卓同盟に吸血鬼に祀られた存在がいるなんて聞

いたことが無い。

「いるのだよ、八神くん。夜の支配者とまで言われた吸血鬼すら崇める存在が……。名をレイル「カーミラ」という。彼女の存在は教団の中でも極秘とされその存在自体迷信のようなものだ。けれど、教団の保管している書物には彼女の存在はハッキリと認められている」

「ハッ！ それはすごいな。化物たちが崇める存在か。それは是非とも殺してみたい」

有栖川の話聞いていた神父がニヤリと顔を歪めて笑みを浮かべる。先ほどのフザけた中年の顔はどこにも無く、目に狂気を浮かべていた。

「それこそが、今回の任務だよ。スミス神父」

「有栖川司教、何を言ってるんです？ 例えば、レイル「カーミラ」という存在がいるのはいいとして、そいつが何故日本などにいるのです」

思わず有栖川の証言にわりこむ八神だが彼の言葉は正論である。わざわざヨーロッパの吸血鬼達の王が日本などに来る理由が無い。

「それはワカラン。けれども、つい先日国内で大きな力が観測され様子を見た同志達の証言をまとめて教団本部に報告したところレイル「カーミラ」と一致する可能性が極めて高いと判断された。そのため、優秀なハンターである、スミス神父とシスターテレサが教団本部から派遣されてきたわけだ。そして、教団からの任務を今伝える。『レイル「カーミラ」を殺せ』ただそれだけだ。方法などに関しては君たちのやり方に任せるらしい。あと、我が日本支部のハンターである八神昌真を君たちの案内人としてようと思うがどうだろうか？」

「ハハハ、了解した。無事殺すことを約束しよう。あと、八神さんの協力については喜んで受けるよ」

笑いながら教団からの正式な命令を受けた神父は有栖川司教に向かって話を続ける。

「さし当たっては、今夜から早速動き始めるとします。とりあえず、荷物を置きたいので部屋の方へ案内して頂きたいのだが？」

神父は八神に向かつて微笑みながら言う。暗に八神に案内しろと言っているのだ。

「八神くん、すぐさま来客用の部屋へ案内して差し上げる。部屋の準備自体は終了している。ではスミス神父、お食事の時間になれば八神くんを向かわせますのでそれまでおくつろぎ下さい」

「ではスミス神父シスターテレサ、自分が案内するのでついてきてください。あと有栖川司教、後で話があるのでこの部屋でお待ち頂けないでしょうか？」

「ああ、構わんよ」

その一言を聞き二人を引き連れ部屋から出ていった。

「なかなか面白い話だったな」

神父はとても聖職者とは思えない発言を平気で八神に投げかける。  
「未熟者である僕には、全てが恐怖としか思えませんよ。なんでそんなすごい化物が日本にきているのか？ 目的は？ 勝算は？ 考え始めるとキリがありません」

「まあ、若い内は悩むといい。そして、人生が終わるまでに一つでいいから揺るぎない信念を持てばいいさ。信念は迷いを消す。それがフラフラしながら生きてきたナイスミドルである私のアドバイスだ」

一瞬だけだが、悲しそうな目になり八神の肩を叩きながら話しかける。狂ったように化物を殺す時とは百八十度違う、優しさが垣間見える悲しい目だった。

「老害のセリフほどマトモに受け取って損なものはありませんよ。八神くん」

神父が真面目に喋ると、今度はシスターが茶化す。

「辛辣なセリフだなシスター、君は若いが信念をすでに持っているのかね？」

「いーえ、今日を生きることには必死なので信念なんて二次です」

「そうか、まあいいさ君も若いしな」

答えあるのかどうか分からない問答に笑いながら、茶化しながら二人は歩く。八神は極力関わらないように部屋まで二人を案内した。「こちらの右側の部屋がスミス神父、左側がシスターの部屋です。何か必要な者があれば部屋の中にある電話を利用してください。あと、これが私の携帯の番号です」

紙に書いた電話番号を二人に渡す。

仕事を終えた八神はすぐさま踵を返し、司教との話に向かおうとする。その後姿に神父が声をかける。

「もしだ。もし君が何か迷っているのなら、悩んでいるのなら、初心を思い出すことだ。君が銃と剣を手にした最初の理由をな。答えなんてものは、悩み歩いて一周してスタート地点に再び立った時に見つかるようなんものさ」

神父の言葉に八神は振り向かない。けれども、その言葉は胸に刻んだ。

「ありがとうございますスミス神父。では急いでいるので失礼します」

そうして、八神はさっきまでいた会議室へと歩き始めた。

「有栖川司教、八神です」

「入りましたえ」

声を確認すると共に室内へ入る。有栖川司教は先程の会話の時とは違い至って真面目な顔で八神の方を向いていた。

「まずは君の感想を聞こうか。彼らはどうだった？　ここまで来るまでにひと暴れしてきたらしいじゃないか」

八神はそのことについて報告しようと思っていたのに、目の前の老人はすでにその出来事を知っていた。全く、油断ならない老人である。

「二人とも実力に関しては、文句のつけようがありません。ただ…

…」

「ただ——どうした？」

「彼ら、特に神父は一般人に危害を及ぼす可能性があります。というより彼は狂っています」

「なんだそんなことか」

老人は肩透かしとでもいいたげに椅子に全体重を預けふんぞり返る。

「あの男が危険人物なのは知っておるよ。教団としても扱いに困るレベルらしい。だが、今回の任務に関して言えば適任であるさ。化物を殺すことに関しては右に出る者はおらんからな」

八神は納得はいかないが、無理矢理次の話題へと移行した。

「次ですが、司教はレイル・カーミラを殺した後のことについては何か考えられておるのでしょうか？」

「と言うと？」

八神の問いに不気味な笑みで有栖川司教が答えを催促する。

「吸血鬼が崇める存在をこの日本で殺してしまえば、日本を中心にして『血の円卓同盟』との戦争になるのでは無いのでしょうか？」

血の円卓同盟自体かなり古いものですが、消滅しているとは限りません。この日本で吸血鬼が暴れまわる戦争になれば大量の犠牲者が出ますよ！」

八神の主張を聞いた後有栖川司教はゆっくりと立ち上がる。

「では君は、レイル・カーミラが何のためにこの日本に来ているのか説明できるのか？ カノ生きる伝説がただの観光のためにこんな極東に来たと考えるのか？ もし、かつての戦争の続きをこのアジアで計画していたらどうする？ 物事には最悪に対して万全の体制で望まねばならない」

「しかし、それならば何故いきなりレイル・カーミラの抹殺という判断に至ったのですか！？ 様子を見てもよかったのでは？」

「彼女が観測されることは教団の資料から見ても多くは無い。のんきなことは言わず、やれる時にやらねばならぬのだよ」

司教の主張はある程度理解はできる。けれども、素直に同意する

ことができない。目の前の老人には何やら裏がありそうな、現段階では勘でしかないがそんな気がした。

「分かりました。今回の任務全力でやらせてもらいます」

「ウム、気をつけることだな」

とりあえず、無理やり不満を心のなかに押し込んで会議室を出た。

「自分のやることに納得は出来た？」

会議室を出ると廊下にシスターが立っていた。

「盗み聞きでもしてたんですか？」

「別に？ それにこの部屋防音でしょ。声は聞こえてこなかったわ」

「なら何で、納得なんてセリフが出てくるんですか？ それとも俺がそんなに迷っているように見えました？」

「ええ、それはもう。なんてったってあの神父が心配するくらいです。気づかない方が馬鹿ですね」

先ほどまでと打って変わってえらくおしゃべりである。一体どうしたわけだ。

「それで？ 何のようですかシスター」

「とりあえずこの場所の案内をお願いするわ。後、あの司教には気をつけた方がいいわ」

どうやら八神同様、あの司教には裏があるとシスターも感じているようだ。

「あなたのパートナーも気をつけないと怖いんですけどね」

「彼はいい意味でも悪い意味でも純粋よ。だから私は彼の隣で戦える」

そういうものなのであるのか？ 八神にとっては狂ったようにしか見えないのだが……そんな人間に命を預けられると目の前の少女は言い切った。

「まあそんなことより、案内してくれませんか？ どうせ食事までまだ時間あるでしょ」

片手に例のごとく巨大な本を抱え、もう片方の手で八神は引っぱられた。初めてあった時はおとなしい人で、あまり人と関わらない

タイプだと思ったけれど案外積極的に人と関わり振り回すタイプらしい。

今夜からはじまる任務に不安を抱きながら、マイペースな人物に振り回される八神だった。

## What to do and why (後書き)

キャラが安定しません。

なかなか大変です。

頑張ってみます。

## 神様を狩る弱者

ビルの屋上、満月の夜に出会った「レイル」カーミラ」と一緒に犬神白夜は街を移動する。

「とりあえず、幾つか質問したいのだけど」

レイル「カーミラは大きな化け犬と化した犬神の背に乗りながら聞く。」

「あなた、一体いつからモンスターに変化したの？」

「なったのは今日が初めてだけど、モンスターになる原因には一つ心当たりがある」

言わずもがな、昨夜の狂人に襲われたことだ。きつとあの時に何か原因がある。だから、人間へ戻るためにするべきことはあの男を見つけることだ。

昨日の出来事を包み隠さずレイルに伝えたと、レイルは渋い顔をした。

「あんまり歩き回るのは良くないわね。せめて自分の身を守れるくらい力の使い方を学ばないと、その男かハンターかどちらかに殺されるわよ」

「力の使い方って？」

そう思い背に乗せたレイルを見ながら犬神が聞く。

「モンスターには、色々と力を得ることがあるのよ。電撃を操ったり火を操ったりね。あなたも恐らく何かしらの能力に目覚めるはずよ。その力を使いこなせるようになって初めて一人前で、ようやくハンターにも対抗できるレベルね」

「そのハンターってのは何なんだよ」

普段の生活であまり聞きなれない単語に対して質問を投げる。

「うーん、簡単に言えばモンスターを殺すプロかな？ 基本的には出会ったら全力で逃げることね。歯向かって簡単に勝てるほど甘い連中じゃないから。でも心配しなくてもいいわよ、この日本のハン

ターはヨーロッパなんかと比べたらレベルは低いし、大々的に人間に被害を加えなければそれほど執念深く追ってくることもないから」  
「へー、それで？ 御主人様は何者なんだよ」

御主人様と呼ぶ気は無いのだが、言葉にしようとするやと自然と変換されてしまう。これがレイル「カーミラ」の能力なのであるのか？  
「うーん？ まあ人間じゃないのは確かなのだけれど、自分の存在を上手く表現できる言葉が無いわね。……あー、そう言えば昔は『吸血鬼の姫君』とか呼ばれていたわ」

「じゃあ吸血鬼なのか？」  
「いいえ、ただ吸血鬼の連中に崇められてたわね。事実よくしてくれたわ彼らは」

どうやら、背中に乗っている奴は本当の化物らしい。初めて犬神が彼女を見た瞬間に生物としての格を思い知らされたように、他の化物達も恐らく歯向かう気持を無くしたのであろう。

「それで？ 御主人様は元々日本にいたのか？ それとも、何か目的でもあつて日本に？」

「ああ、ただの観光よ」

あつさりと背に乗った見た目は少女の化物が言う。

「観光！？」

「ええ。昔大陸にいた九尾の狐と勝負してあいつがこの日本まで逃げてきた時に初めて来たのだけどその時日本が気に入ってね。何十年に一回くらいはここに来ているの。ただ、昔はもつと妖怪達がいただけでも最近じゃめつきり少なくなつたから寂しいはね」

妖怪が珍しくなつたからこそ、自分を助けてくれたのだろうか？ それとも元々お節介なのだろうか？ いや、お節介とは思えないな、世話焼きはボコボコになるまでの体罰で物事をわからせようとは思ひしないと思う。

先ほどのビルで背中に乗せた御主人様にボコボコにされるまで可愛がられた犬神はさっきのことを思い出し背中に寒気を走らせながら、夜の街をかけていった。

場所を移動しろと命令したのはレイルだった。レイルは自身の能力も含め流石に暴れすぎたと反省しており、すぐさま移動することになった。曰くレイルのような強大な力の持ち主は多少なりとも力を使うだけで教団のハンターに嗅ぎつかれるらしい。いくら日本とはいえ、力を使ったのなら場所を変えるのは常識だった。

「ここらでいいわよ」

目の前に地元の人間でもなければ忘れられているであろう、社があった。周りは樹齡を感じさせる大木で囲まれており、また場所も小高い丘のようなところである。白狼と少女が面と向かって会話を行ったとしても周りから目撃されることは無いであろう、腕と鼻の利くハンターが近くを通ったならわからないけれど。

「とりあえず、現状を確認しておきましょうか。シロは昨日狂人から化物へと変化させられた。シロとしては人間に戻りたいと考えているのね？」

「そうだよ。こんなわけも分からない世界に飛び込むより、元の世界で人間として生きたいよ。それに……今日のように突然我を忘れて吠えまくり駆け出すのは正直恐ろしい。まるで自分が自分じゃないみたいだ」

それこそが、人間と化物との違い。どれほど理性を得た化物でも、基本的に彼らを動かすのは本能だ。獣の化物故にその傾向がより強いのだろう。

それを同時に恐れる。なまじ力が強大になったがため、それが暴走するのを恐れる。

自分がこれまで築いた日常を呆気無く、砂の城のように壊されるのが怖いのだ。

「ふーん。まだ気分は人間ってわけか。あと、一言言っておくと一度化物の領域に足を踏み入れて人間の世界には戻ってこれた例は非常に少ないわ。人間という存在から化物へと至った例はかなり多い

けれども、逆の例は殆ど無い。人間のお伽話でも大概そうでしょう。化物の結末なんて最後は人に殺されて終了よ」

犬神が人間へと戻ろうという目標を掲げてそれにいきなり水をさした。

彼女の的にはこの世界は甘くないという教訓を教えたつもりであったが、相手は元はただの学生である。夢と希望を背負う若人である。それに向かって努力する前から絶望的観測を教えるのはいかなものだろうか。

「それでも、俺は人に戻りたいんだ。毎朝、妹に起こされて、幼馴染と学校へ行き、授業を適当に聞き流して、家に帰る。くだらない繰り返しだと思いかもしれない。無駄な毎日だと思うかもしれないけど。俺はそこに愛着を持ってるんだよ！理由のわからない狂人に意味も分らず狂わされたままでたまるか」

感情が吠える。彼は確かに人としての大事な部分を奪われた。それと引き換えに力を得たが、彼が望んだわけでは断じて無い。不条理に狂わされた人生に憤る。

「ならやることは決まりね。シロ、あなたはとりあえず力を使いこなすようになりなさい。乗りがかった船、しばらくは協力してあげる。それから、力が使えるようになったら、次はその狂人探しね。可能性的の言って、化物へ至らしめた人物が戻れる可能性を一番知っている。まあ、あなたが足掻きたいのならこれがやるべきコトでしょうね」

そうだ。そうである。あの日の自分はまるで動けず、おもちゃの様にあいつの手のひらで踊った。今思えばそれが相手の能力というものなのかも知れない。なれば自分も武装しなくてはいけない。忌まわしくもあの狂人が戦う力をくれたのなら十二分に使いこなしてきつちりと借りを返さなければならぬ。

「分かった。それで一体どうすればいいんだ？いきなり能力なんて言われてもわからない」

「まあ、それはいきなりできるようになるものでも無いし、かと言

って時間をかけるようなものでも無い。何らかの兆候をつかめば早  
いんだけど、まあいい。まだ。それよりも先に聞きたい事がある」  
辺りに小さな風が吹く。木の葉がこすれる音がハッキリと聞こえ  
るほど辺りは静寂に満ちていた。

「シロ、あなた明日からの生活どうする？ あなたは人狼だと思う  
けれど、朝がくれば果たして人の姿に戻っているのかしら？ もし  
戻っていたとして、暴走が無く毎日を暮らせるのかしら？」

ドクン！

心臓の鼓動が速く、強くなった。そうだ、今人語を喋ってるから  
忘れていたけれど、今の俺は化け犬状態だ。朝日が登れば元の人の  
姿に戻る保証なんてないし、戻っても人の世界に紛れることがで  
きるのか？ 今日みたいに暴走したときに、誰かを傷つけずにすむ  
のか？

悩みは恐怖となつて胸を締め付ける。ああそうだ、俺は何もかも  
を失っているんだと、今気づく。

そんな犬神の顔を見て、レイルはうつすらと笑いながら答える。

「ふふふ、あんまり真剣に悩まないの。なるようにしか世界は回ら  
ないのだから。でもまあ、人型に戻すかどうかは無理だけど、暴走  
に関する部分は私がどうにかすることもできるわ」

「どうやって」

「ふふふ、アナタは私のことを何て呼ばなきゃいけないのかしら？」

「あん？ それは『御主人様』」

頭の中に浮かんだのはレイルという文字、けれども、決してそれ  
は発音できない。口が自然とある文字に上書きされる。

それこそが、彼女の能力である。

「私の能力は『絶対命令』私の言葉は何よりも優先される命令とな  
る。だから、シロ『暴走するな』」

その瞬間犬神は体の中の未知なる自分の力に対しての恐怖がほん  
の少し安らいだ気がした。

まるで誰かに抱きしめられたかのように。

「こう唱えればとりあえず、なりたての化物がよく起こす力の暴走はとりあえず心配無いわ」

自信満々で目の前の犬神の主人が言う。偉そうな態度なのに表情は褒めて褒めてとねだる幼子と変わらないように見えた。

そんな和んだ瞬間だったからだろうか。そいつは一瞬で訪れた。

「捉えた！」

静かな闇夜の中に自身達以外の声が交じる。犬神より早くレイルが身構えるが気づいた瞬間からすでに後手だった。

「『それ隠れたるものの顕れなく、秘めたるものの知らぬはなく、明らかにならぬはなし』、日常を生きるものと我らを互いに『拒絶せよ』」

詠唱と共に世界が歪む。レイルがハンター達の仕業だと気づきすぐさま次の手を考え始めた時彼らは目の前に現れた。

「お前がレイル」カーミラか。なるほどな、化物の中の化物である吸血鬼どもがお前を崇めて奉った理由がなんとなく分かるよ。確かにお前は桁違いだ」

現れたのはおおよそ聖職者に相応しくなさそうな狂った目をした神父と額に汗を浮かべながら真面目な表情で大きな本を広げながら詠唱を紡ぐシスターだった。

展開されていく結界の速さ、目の前に現れた不気味な存在感を持った異国人。

レイルの頭の中で素早く現状の理解をする。相手は日本のハンターでは無く、一流のハンターだと。

「シロ、いいからよく聞きなさい。悪いけどアナタを守って家まで送ってあげられそうにはないわ。だから、必死になって逃げなさい。油断も躊躇いも一切してはダメ、その瞬間アナタの世界は終わるわよ」

「ちよつとまでよ。せめて逃げるなら——」

「自分の心配だけしてなさい！」

レイルは愛犬の反論を許さない。無論そんな余裕も時間もない。この日本のハンターなど三流、二流だと決めつけていた。けれど、わざわざ本場の一流が出てきたなら話が違う。恐らく自分一人なら何とかなる。けれど、今日生まれたてのルーキーという重荷を背負って戦える相手では断じて無かった。

「じゃあね。運が良ければまた会いましょう」

彼女は最後に笑った。どう考えても、笑える状況などでは無く。今日の前に広がる景色には不釣り合いだったが、その全てを塗りつぶすほど綺麗な笑みだった。

そして、小さくつぶやいた。

「『逃げる』」

その命令は絶対だった。耳に届き脳が理解する前に、彼女が言葉を発した瞬間に犬神白夜は逃げ出した。

けれども、そこにはもう結界が張られているはずである。普通に考えれば逃げれるわけが無かった。

しかし、今回ばかりは勝手が違った。はなから、シスターと神父が相手にしているのは、吸血鬼達の神にしてその噂に全く違わぬ化物の頂点である。彼女を閉じ込める檻からネズミが逃げ出そうとも結界をはり続けるシスターは全く気にも止めなかった。その上、今の犬神はレイルにより「逃げる」と命じられた身である。夜の支配者たる彼女の命令を受けた彼は自身の存在の小ささと大いなる存在の命令の効果により意識することなく、展開された檻から逃げ出すことに成功した。

「おい！ 犬が逃げたぞ」

神父は目の前で起こったことをありのまま隣のパートナーに伝える。が……

「うるさい！ 黙っててこんなの初めて何だから。何なのあれ……結界で捉えようとしても存在が大きすぎて、上手く張れない。目測をする度に力が強大になって術を継ぎ足さないといけない。こんな

のありえない！」

普段の彼女を知るものなら、恐らく驚くであろう。基本的にマイペースな彼女が我をなくして慌てていた。神父も彼女のそのような姿を見るのは初めてだった。

「まあいいさ。結界そのものは目の前のアイツが逃げなければどうでもいい。結界の外のことは、八神クンに任せてる。こっちは化物……いや、邪神狩りで行こうか」

神父は右手にバールのような杖を左手に鉄パイプを持ってレイルの前に立つ。

「アナタ、教団本部のハンターかしら」

レイルは敵を前にしても全く動ぜず、問いを投げかける。

神父も強大な力を持った敵を前に慌てず返答する。

「そうだよ。レイル」カーミラ、曰く私は知らなかったがこの世界じゃ有名だそうじゃないか。あのクソツタレな吸血鬼達の神なんだってな。だが、それは些か不愉快だな私は真面目な聖職者ではないが、それでも、貴様のような化物が神を気取るのは気持ちが悪い」

教えに背くとか、信仰心から認めない、などというものでは無く、神父の心に浮かんでは単なる嫌悪感。

「神というのは、弱者がすがりつく唯一にして無二の存在。つまり、牙を持たず、爪を持たない、生まれ持つての弱者である人間だけに許された救いだ。それを、生まれつきの強者である獣の様な貴様等が真似をするなど不愉快だ！」

手にした武器を握りしめ、軋んだ音がかすかに聞こえる。

「あつそう。私は信仰なんてどうでもいいし、私が祀られてるのだって吸血鬼達が勝手にやったことだし、どっちかって言うと日本の八百万の神の考え方の方が私は好きだけど。まあそれはどうでもいいわね。では、始めましょうか人間さん、ごきげんすがりつくべき私がここにいるのだから」

その一言で神父が我が身も顧みず飛びかかった。

満月の夜、  
そうして戦いが始まった。

**神様を狩る弱者（後書き）**

がんばります。

次の話は一週間後ぐらいを目指します。

## 猫を噛めるネズミ

必死

今の犬神を表す言葉としてこれが一番相応しい。

すぐに結界から飛び出た犬神はその場から離れようとした。

レイル「カーミラの絶対命令という恩恵を受け、結界さえ抜ければ簡単に逃げ切れるはずだった。

少なくとも、レイル「カーミラはそう考えていた。自分がこのハ  
ンターを引き付けければシロは助かると。

けれども、教団の、神父の方が何枚も上手<sup>うわて</sup>だった。

「何だろうな、あの神父と会ってから、僕の祈りは全て無駄になる」  
愚痴をこぼしながら、結界を飛び抜けて来た犬神を八神は確認す  
る。

神父の考えが見事に的中したことに対して辟易としながら。

「結界も張らずに、僕が戦うんですか!？」

それは神父とレイルが戦う少し前、犬神とレイルが初めて出会っ  
た廃ビルの屋上でのこと。

レイルが能力を使い、その形跡を辿り神父とシスターそして、八  
神が廃ビルの屋上で集合していた。

「ああそうだ。キミも感じないか？ レイル「カーミラという存在  
の痕跡に消えそうにはなっているが、確かに化物がもう一匹いた。  
もしかすると、行動を共にしているのかも知れん。もし、そいつが  
レイル「カーミラと別れて行動した場合キミが対処するんだ」

「レイル「カーミラと一緒に行動している存在というのは、やはり  
吸血鬼なのですか？」

彼女が吸血鬼に崇められていたという話を聞いた今、行動を共にする化物と言えそれが妥当だと八神は感じた。

けれども、神父は頭を横に振った。

「いや、吸血鬼の気配とは少し違う気がする。アイツらの場合はもつと血の二オイがする。けれども、コイツは獣の二オイだ。大方日本にいるモンスターをペットにでもしてるんじゃないのか？」

神父は経験と勘を交えながら推測していく。それはおおよそ正解であり、十分及第点だった。

「では、別れずに行動していた場合は僕も結界の中でそいつと戦うと考えていいんですね」

一応の確認を八神は神父に向かって行う。自身もハンターの端くれ、戦いには参加するつもりだった。

「いや、キミは結界の外で待機しておいてくれ。相手がバラけて戦ってくれるのならまだしも、連携して戦ってくるつもりなら正直、一人で暴れる方がやりやすい」

「ですが！」

「それに保険をかけておきたい。ああ、確かに理想は結界の中で両方叩くことだ。しかし、相手は私の予想よりはるかに強大のようだ。もしかしたらシスターの結界も破られるかも知れない。その時、レイル・カーミラのオマケが逃げても私は面倒を見る気はない。だから、キミがやるんだよ八神くん」

「しかし、結界を張らずに戦闘行為を行うことは――」

「大丈夫だよ。もう夜も深い、これまでの探索でも誰も人に出会わない。それに昔はハンター達も結界など張らずに戦闘を行っていた。そして何よりキミは優秀だ」

有無を言わせぬ眼光で八神を見る。思わず目を逸した八神はシスターと目が合う。彼女はどうか自分の結界が破られるかもしれないと神父に言われたことが癪に障わったのか頬をふくらませていた。相変わらずマイペースの彼女を見て、少しだけ羨ましいと感じながら八神は再び視線を神父に戻した。

「了解しました」

言葉と共に心を決める。出来れば結界の外での戦闘行為という危険な行為はやりたくないが、化物を野放しにしているという理由にはならない。せいぜい結界の中で全ての片が付くことを祈るのみである。

「では頼んだよ八神くん」

簡単な作戦会議が終わると、八神達一行はレイル「カーミラ」の力の残り香を頼りに彼女を追い始めた。

探索は初日だが、かなり幸先が良い。もしかすると、もう一度レイル「カーミラ」が力を使えば接触できるかも知れない思いながら。

「『求めよ、さらば与えられん。たずねよ、さらば見出されん。門を叩け、さらば開かれん。すべて求むるものは得たずねぬる者は見出し、門をたたく者は開かるるなり』出てこい、『スカイウォーカー』」

八神は逃げる化け犬を確認すると共に、術式が書きこまれた指輪を詠唱と共に地面に殴りつける。するとそこから、一台のバイクが召喚される。

バイクの名はスカイウォーカー、教団の日本支部が完成させた乗り物である。ただし、クセが強すぎるのと、西洋のハンター達が戦いにバイクなどを利用することなどを好まなかったため、好き好んで乗っているのは八神だけだった。

「さあ、化物狩りに行きましょうか！」

闇夜にエンジン音を轟かせ先行している化け犬を猛スピードで追いかけて始めた。

犬神はすぐさま後ろから追われていることに気づいた。なぜなら、それはすごく不自然な事態だったから。

犬神はビルの屋上やマンションの屋上を次々と飛び移りながら逃げていた。車ですら置いていけそうなスピードを自分の体に付いている四つの足を存分に使ってだ。風を置き去りにし風景が次々と入れ替わっていく、ついてこれるものはいないと感じた。けれども、ありえない事が起きる。エンジン音が響いて徐々に自身に近づいて来ているのだ。

一瞬だけ後ろを振り向いた時、犬神は驚愕した。バイクがビルの屋上と屋上を飛び跳ねながら自分を追いかけて来ていたから。

自分の逃走ルートをなぞる様に、バイクは正確に追いかけてきた。しかも、エンジン音が近づいてくることから、どうやら向こうの方が速いらしい。

「なんなんだあれ!？」

自身の見た、バイクがビルとビルとを飛び移りながら自身を追いかけてくる状況に思わず犬神は叫ぶ。

犬神は現在相当焦っていた、なんせ向こうのほうが速いのだ。ただ逃げるだけならやがて追いつかれてゲームオーバーである。けれども、焦っても犬神のスピードは速くはならない。頭をひねり、何らかの方法を見つけないければそこにあるのは終わりだ。

とりあえず、急な方向転換をし、ジグザクに走るようにし何とかバイクを撒こうとする。犬神は四本足、急激な方向転換には獣の方に分があると考えた。

けれど、バイクは決して振り切れない。犬神自身でも何度も無茶だと感じる方向転換を限界ギリギリで成功させているのに、後ろから聞こえてくるエンジン音は遠ざからない。それどころか、距離が

どんどん詰まっている。

パン！

必死に頭を働かせようとしていた犬神の脳内を、響いた銃声があっさりと真っ白にした。銃弾は犬神の脇を通りぬけ、マンシヨンのコンクリートへ突き刺さった。

バイクの男の放った弾丸はハズレたわけだが、かわりに犬神の焦りを恐怖へと変化させた。

ゲームオーバー？ 終わり？ 曖昧な言葉で自分を欺こうとしたが、今の銃声でハッキリと自覚する。俺は今殺されようとしているんだと。逃げ切れなければ死ぬのだと。

恐怖が頭を支配し、一瞬パニック状態に陥りかける。しかし、その瞬間もう一度、あの命令が脳に響く。

『逃げる』

レイルの命令が犬神のパニック状態を落ち着かせる。彼女の命令は命令された者をベストな結果へ導こうとしている。

そうだ、慌ててる場合じゃない。できることをやるしか無い。

吹っ切れたように、犬神の思考はクリアになっていく。そして、次のビルへ飛び移ろうとする。けれど、それはビルの屋上では無く、ビルの中腹に向かってである。

犬神自身は一切減速せずに、今までのように屋上を目指して飛びつかず、ビルの中腹へ弾丸の様に突っ込んだ。

四本の足と背中の筋肉を十分に利用し、自身の反動を吸収する。

そして、重力に導かれる前に自身を追うハンターが自分と同じようにビルへ突っ込んでくことを確認し隣にある少し小さなビルの屋上へ向かって自身の体のバネを十分に利用し飛んだ。

「ざまあみろ」

飛び移りながら犬神が叫ぶ。流石にあのスピードのままビルに突っ込めば衝撃でバイクが持たないだろうし、犬神のように獣の規格外のバネがなければ加速の無い状態のバイクで自身のいるビルまで飛び移っては来れないだろうと考え、勝ち誇る。

しかし、それもまた裏切られる。

バイクは空中で姿勢を変え、ビルに対して着地する。そしてそのまま、ビルの壁をまるで地面の様に走った。無論重力に引かれて落ちる気配など微塵も無かった。

そのまま十分に加速したバイクは自分がいるビルの屋上へ飛び、何事も無かったかのように着地した。

「残念だったね」

屋上で犬神に向かって、バイクの男が大口径のリボルバーをこちらに向けバイクにまたがりながら話しかけてくる。

「このバイクの名前はスカイウォーカー。『重力無視』っていう術式が組み立ていてね、多少無茶な運転しても何とかなるんだ。でなければ、ビル屋上をバイクで疾走するなんていう恐ろしい行為はしないよ」

軽く自虐的に笑いながら、けれども全く隙は見せずに目の前のハントーは話しかけてくる。

「じゃあそろそろ、幕引きだね。最後に名乗っておくよ、僕は八神昌真。僕とのドライブに付き合ってくれてありがとうね、化け犬」

そう言つて、引き金に力を込めるのが見える。

犬神は覚悟を決める。無論死ぬ覚悟でも無いし、先の見えきつた逃走をする覚悟を決めたわけでもない。犬神が決めたのは生き残るための覚悟。追い回されたネズミが目の前の猫を噛む決心をしたのだ。

窮鼠猫を噛む。けれども、猫を噛めるネズミは多くはない。レイルの命令が生存確率が一番高そうな選択肢を選ばせたのか？ それとも、獣の本能か？

八神に向かい合い引き金を引こうとする刹那を犬神は必死に見極める。

パーン！！

一度聞いた破裂音が再び響く。だが、その銃声が響く僅かに前に犬神は八神に向かって飛び掛かる。タイミングはベスト。見事に八



るのみ、けれどもその咆哮はもはや巨大なハンマーで殴るのと同じ威力だった。

「ぎゃあ、――」

そんな威力を間近に受けた八神はバイクごと吹っ飛び、壁に叩きつけられた。そして悲鳴を上げる。けれど、自身の叫びは途中で途切れた。いや、周りからみれば彼は相変わらず叫んでいるのだが、彼の声を彼に届ける両の耳をやられた。この時やられたというのは単純に音が聞こえなくなったただけでは無い。耳の奥にある三半規管まで確実に損傷を受けていた。

こうなれば、一方的に不利なのは八神の方だった。無音の世界に放り込まれ、オマケにまともに立てもしない。今襲われたらただの餌になるしかない。バイクで逃げようにも、あのバイクを扱うためには絶妙のバランス感覚が絶対に必要だった。

そんな状態になった八神を犬神は一瞥するとそのまま、屋上から飛び去り逃げようとした。本来なら、弱った相手にはトドメを刺すのが常識である。

だが、彼は未だ甘い人間気分である。相手を殺すだけの覚悟など持っていなかった。それに、犬神自身決着はついたと感じている。だから、ある程度安心して、その場からさった。

「ちくしょう。まだ、僕は負けてないぞ」

八神は必死に状態を起こし、犬神が逃げた方向を睨みつける。今夜は満月、月明かりのおかげで白く輝く獣を彼は見失ってはいなかった。

左手で拳銃を握り、ゆつくりと標的に向かって狙いを定める。

目は霞む。力は入らない。けれど、ここで引き下がるのは彼の意地が許さなかった。せめて一矢報いてやるという気持ちで重たい拳銃のトリガーを引き絞る。

バーン！

そして、今夜三度目の銃声が鳴る。大口径の拳銃に相応しい爆音を響かせる。放たれた弾は彼の執念なのか、正確に狙った通り化け犬へ向かって飛んでいった。

「当たれ！」

自分自身には聞こえないが叫ばずにはいらなかった。それと同時に視界が黒く染まっていく、どうやら自身の限界らしい。そして程なくして八神は意識を手放す。自分と相対した化け犬に自分の弾が当たり、ビルから落下する瞬間を目に焼き付けながら……。

## 猫を噛めるネズミ（後書き）

何とか続き書けました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0917x/>

---

夜の歩き方

2011年10月9日03時24分発行